沖代地区条里跡　大塚西中野地区
永添玉迫地区　高畑下ノ町地区
佐知遺跡　山中城跡
中津城（Ⅸ）　古代豊前道跡
長者屋敷官衙遺跡　八並城跡

市内遺跡発掘調査概報５

2011年度

中津市文化財調査報告 第56集

2012

中津市教育委員会

例　言

一、　本書は大分県中津市教育委員会が2011年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査概報である。

一、　調査は2011年度国宝重要文化財保存整備事業および2011年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、　調査主体　　中津市教育委員会
調査責任者　北山　一彦　（中津市教育委員会教育長）
調査委員　　後藤　宗俊　（別府大学名誉教授）
　　渋谷　忠章　（元大分県立歴史博物館長）
　　高瀬　要一　（元奈良文化財研究所文化遺産部長）
　　山中　敏史　（奈良文化財研究所名誉研究員）
　　清野　孝之　（　　同　　考古第三研究室長）
調査指導　　後藤　晃一　（大分県教育庁文化課副主幹）
調査事務　　藤原　義郎　（中津市教育委員会文化振興課長）
　　田中布由彦　（　　同　　文化財係長）
　　平田　由美　（　　同　　文化財係）
調査担当　　高崎　章子　（　　同　　文化財係）
　　花崎　　徹　（　　同　　文化財係）
　　浦井　直幸　（　　同　　文化財係）

一、　沖代地区条里跡井田地区、苅又地区、大塚西中野地区、永添玉迫地区、高畑下ノ町地区、佐知遺跡、山中城跡の調査を浦井が、沖代地区条里跡橋爪地区、八並城跡の調査を花崎が、中津城跡、古代豊前道跡、長者屋敷官衙遺跡、八並城跡の調査を高崎が行った。

一、　本書の執筆、編集、写真撮影は第１章・第２章（1）（2）（3）・第３～７章を浦井が、第２章(4)・第10章（９・10区）を花崎が、第８・９章・第10章（４～６区）を高崎が担当した。

一、　遺構、遺物の実測、製図、拓本などは調査担当者の他、浅田くるみ、穴井美保子、猪立山順子、岩本敏美、金丸孝子、塩谷絹子、橋内順子、古市智子、松村たか子が行った。

一、　現場作業は下記の皆さんの協力による。
今永夏樹、植山加奈江、河原田実夫、松本浩司、宮津しのぶ、合嶋玲子、金崎ミチ子、川口政代、加来晴美、広津トシ子、辛島孝、井上ミツル、角美枝子、若木和美、岩本慶子、末広洋子、穴井美保子、猪立山順子、岩本敏美、金丸孝子、塩谷絹子、橋内順子 、松村たか子
(順不同・敬称略)

目　　次

例言
目次

第１章　地理と歴史的環境 …… 1

第２章　沖代地区条里跡 …… 3
（１）これまでの調査 …… 3
（２）井田地区 …… 4
（３）苅又地区 …… 4
（４）橋爪地区 …… 5

第３章　大塚西中野地区 …… 8

第４章　永添玉迫地区 …… 8

第５章　高畑下ノ町地区 …… 9

第６章　佐知遺跡 …… 9

第７章　山中城跡 …… 10

第８章　中津城　三ノ丁おかこい山 …… 13

第９章　古代豊前道跡 …… 17

第10章　長者屋敷官衙遺跡・八並城跡 …… 19

報告書抄録 …… 34

第１章　地理と歴史的環境

1. 中津城
2. **中津城下町遺跡**
3. 豊田小学校校庭遺跡
4. 沖代地区条里跡
5. 高畑遺跡
6. 相原廃寺
7. 相原山首遺跡
8. 鶴市神社裏山古墳
9. 坂手隈城跡
10. 弊旗邸古墳群
11. 上ノ原横穴墓群
12. 勘助野地遺跡
13. 上ノ原平原遺跡
14. 大池南遺跡
15. 佐知久保畑遺跡
16. 佐知遺跡
17. 加来居屋敷遺跡
18. 黒水遺跡
19. 大畑城跡
20. 長者屋敷官衙遺跡
21. ボウガキ遺跡
22. 大悟法地区条里跡
23. 原遺跡
24. 田丸城跡
25. 福島遺跡
26. 福島地下式横穴
27. 前田遺跡
28. 森山遺跡
29. 岩井崎横穴墓群
30. 犬丸川流域遺跡
31. 洞ノ上窯跡
32. 安平遺跡
33. 城山横穴墓群
34. 城山古墳群
35. 才木遺跡
36. 城山窯跡群
37. 草場窯跡
38. 踊ヶ迫窯跡
39. ホヤ池窯跡
40. 大谷窯跡
41. 野依遺跡
42. 野依地区条里跡
43. 上畑成遺跡
44. 諸田南遺跡
45. 諸田遺跡
46. 天貝川遺跡
47. 定留遺跡
48. 定留貝塚
49. 和間貝塚
50. 定留鬼塚遺跡
51. 是能遺跡
52. 田尻大迫遺跡
53. 舞手橋東段上遺跡
54. 是則遺跡
55. 全徳遺跡
56. ガラヌノ遺跡
57. 合馬遺跡
58. 亀山古墳
59. 東浜遺跡
60. 古濱東遺跡

第１図　中津市内主要遺跡分布図（S=1/50,000）

第１節　地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約８万６千人、面積491㎢を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

第２節　歴史的環境

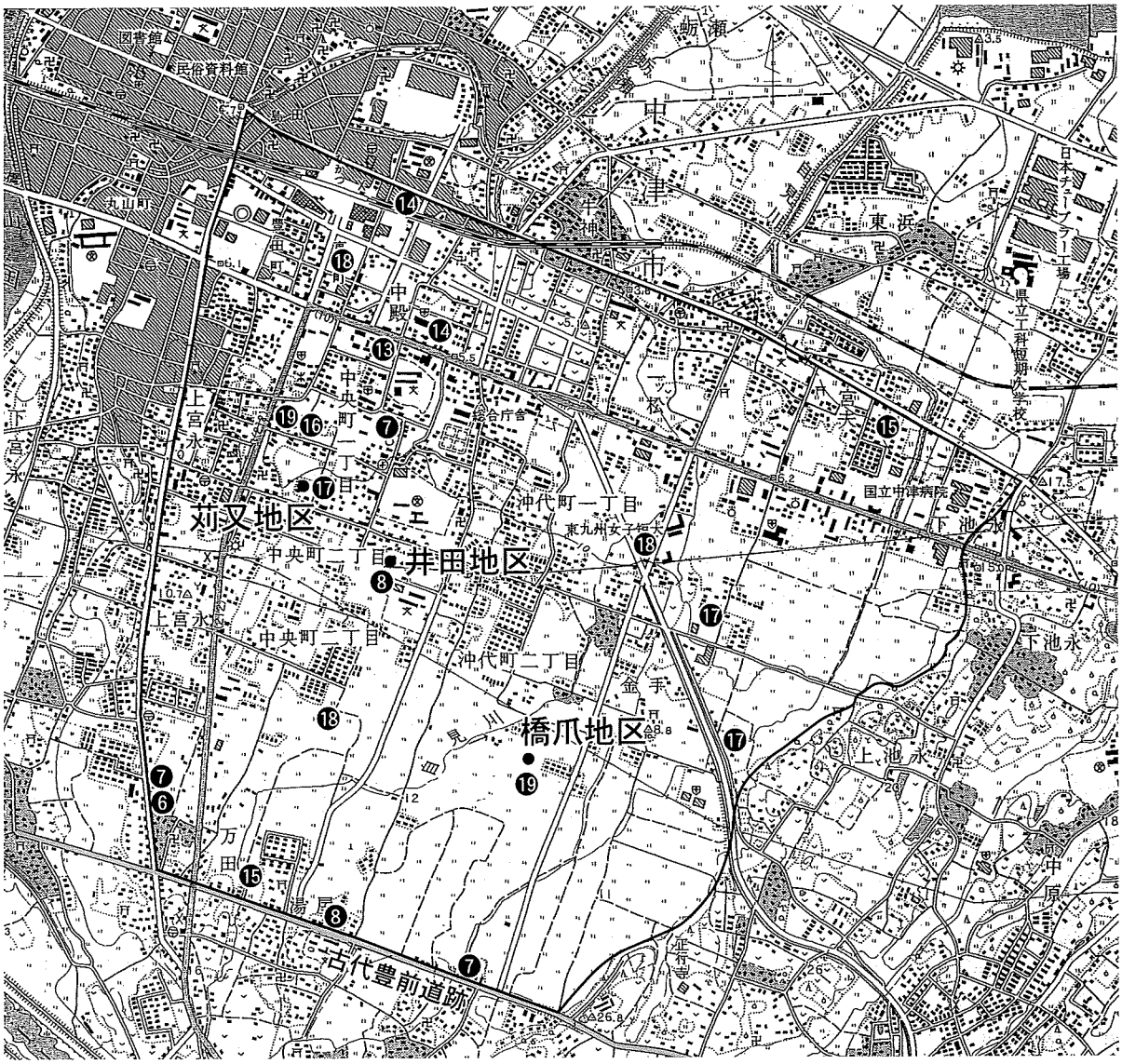
市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や大坪遺跡で発見されている。縄文時代は上畑成遺跡（43）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見されている。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚やボウガキ遺跡（21)、女体像と見られる土偶が出土した高畑遺跡（５）が挙げられる。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。５世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、５世紀後半から７世紀前半にかけては上ノ原横穴墓（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29)、城山古墳群（34)、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、７世紀から９世紀にかけて相原山首遺跡（７）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡（45）や定留遺跡（47）でまとまって発見されている。

古代には寺院遺跡として、７世紀末に白鳳系の相原廃寺（６）が建立される。また、遅くとも８世紀初頭には沖代平野に条里制（４）が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。８世紀後半にはその官道に沿う地に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）が確認された。また、諸田南遺跡（44）で掘立柱建物群や円面硯が検出されている。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、踊ヶ迫窯跡（38)、草場窯跡（37)、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き緑釉陶器や墨書土器が出土した三口遺跡がある。

中世は、長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世は関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632（寛永９）年に完成を見る（2)。1717（享保２）年に奥平氏が入部し、1871（明治４）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。

第２章　沖代地区条里跡



第２図　沖代地区条里跡周辺図（S =1/25,000）　●の中の数字は調査年度（平成）を表す

(1) これまでの調査

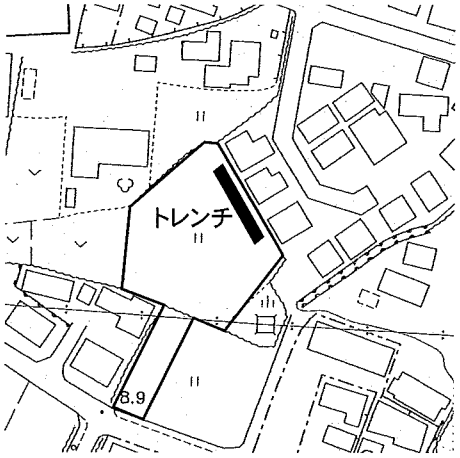
沖代地区条里跡は沖代平野に広がる奈良時代に施行された水田跡である。近年まで明瞭にその区画を見ることができたが、急速な宅地分譲・店舗建設により水田は虫食い状態を呈している。東部・南部に残る往時の景観を保護することが急がれる。

中津市教育委員会では1995年度から国庫補助を受け、開発に伴う確認調査を実施してきた。６世紀後半代の掘立柱建物・竪穴住居・溝遺構は、古代豊前道跡沿線で確認されている（平成７・８・15年度調査区）。奈良時代の竪穴住居は条里西の平成19年度調査区で発見された。また、該期の可能性のある水田区画が条里北側の平成14年度調査区で見つかっている。11世紀中～後半代の土坑は古代豊前道跡北側の平成15年度調査地点で確認された。中世末の遺構は、平成17年度苅又地区で調査された溝遺構があり、景徳鎮産小皿小片が出土した。

今年度は、井田地区、苅又地区、橋爪地区にて民間開発に伴う確認調査を実施した。

(2) 井田地区

第３図　調査区位置図（S=1/25,000）



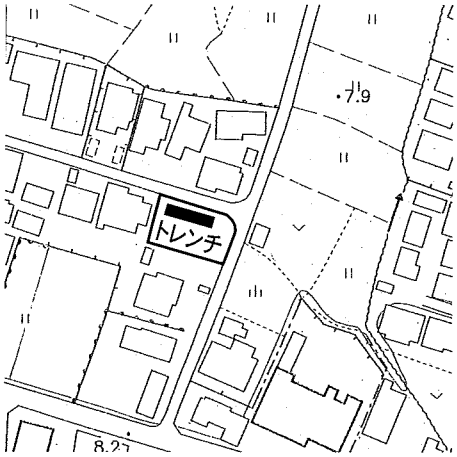
第４図　調査区位置図（S=1/2,500）

平成23年9月21日、中津市個人より中津市中央町２丁目663番１他地内における集合住宅建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。これを受け確認調査を平成23年10月６日に実施した。

調査は調査区内の建屋建設地に対してトレンチを１本設定して行った。その結果、トレンチ東端では地表面から１ｍ下で黄白色の地山を検出したが、遺構・遺物は確認できなかった。トレンチ西端は地表面から30㎝で地山を検出したため、往時は西から東に下る地形であったと考えられる。地表面に土師質土器の散布が認められることから付近の開発の際は注意を要する。

(3) 苅又地区

第５図　調査区位置図（S=1/25,000）

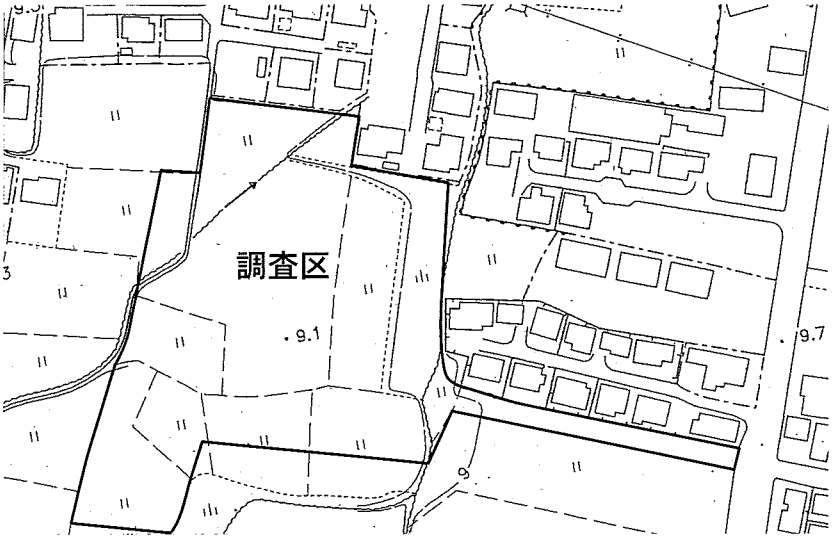


第６図　調査区位置図（S=1/2,500）

平成23年11月１日、医療法人英然会より中津市中央町１丁目748-3他地内における老人ホーム建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。これを受け平成23年11月２日、確認調査を実施した。

調査は調査区内の建屋建設地に対してトレンチを１本設定して行った。その結果、地表面から1.4m下で黄褐色の地山に至り、多数の稲株状の痕跡を認めたものの遺構・遺物は確認できなかった。

(4) 橋爪地区



第７図　調査区位置図（S=1/2,500）

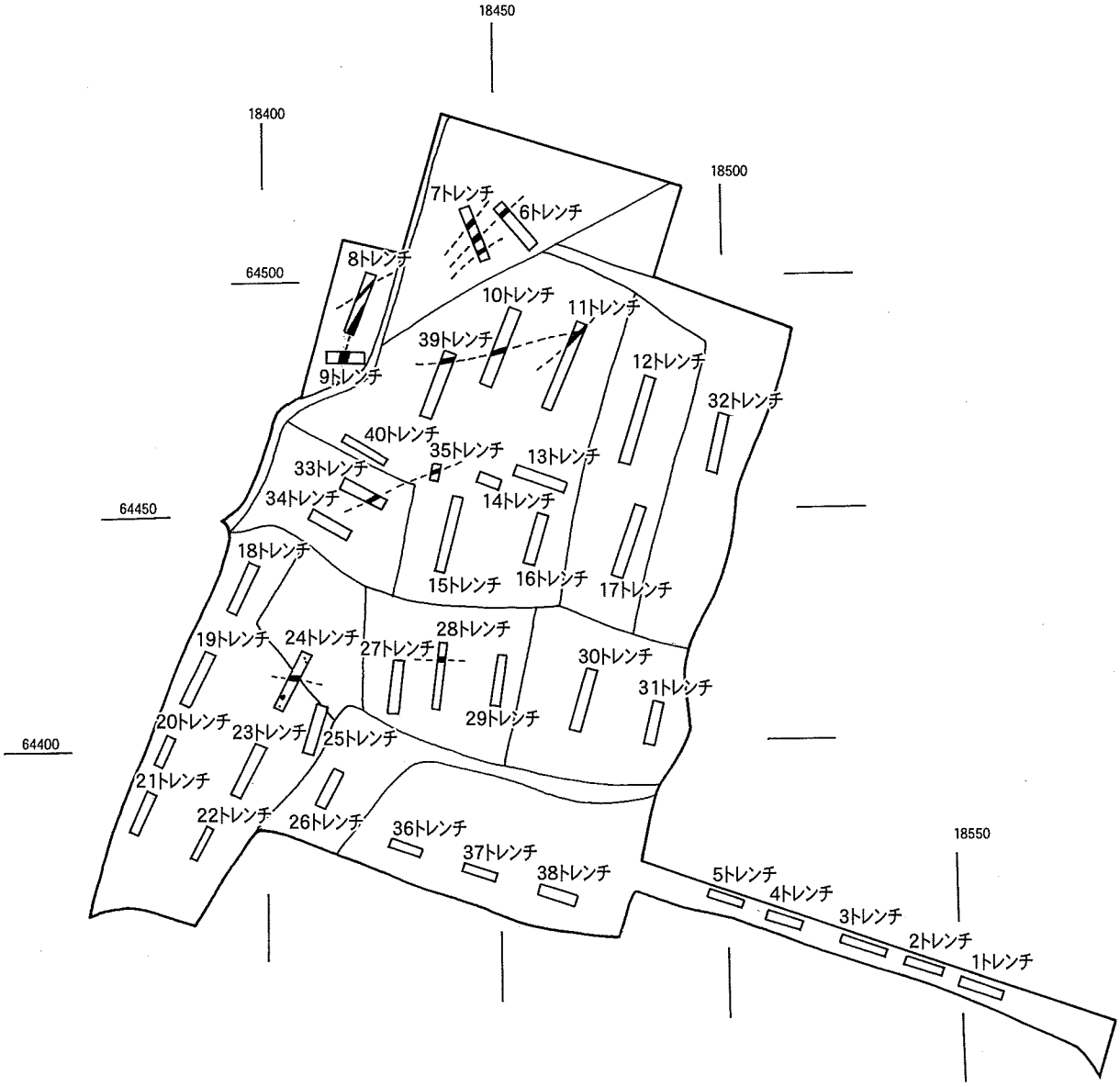
調査に至る経緯

平成23年12月に中津市大字永添340番地２他で宅地造成に伴う埋蔵文化財の照会がなされた。調査地の大半は盛土されるが道路の新設に伴う地盤改良が実施されることから確認調査の実施が決定した。

トレンチ

調査区に40本のトレンチを設定し重機により掘削をおこなった。現道から造成地までの取付道に５本のトレンチを掘削した。遺構、遺物は検出できなかった。造成地の北側で溝状遺構が検出された。６トレンチで溝状遺構を検出した。幅約100cm。深さは掘り下げてなく不明。７トレンチで溝状遺構を３条検出した。溝１は幅約88cm、深さ約12cm。溝２は幅約95cm、深さ約18cm。溝３は幅約45cm、深さ約10cm。いずれも暗灰色の砂質土で出土遺物はなく時期は不明。溝２は６トレンチの溝状遺構と同一であろう。８トレンチで２条の溝状遺構を検出した。溝１は幅約50cm、深さ約15cm。溝２の幅は不明、深さ約20cm。須恵器片、土師器片が出土した。９トレンチは溝状遺構１条を検出した。幅約140cm、深さは掘り下げてなく不明。検出面で須恵器の甕や土師器の高坏などが検出された。10、11、39トレンチで検出された溝は同一であろう。幅約40cm。深さは掘り下げてなく不明。11トレンチで別の溝状遺構につながる。検出面で時期差は確認できなかった。24トレンチで溝状遺構１条、ピットを検出した。溝は幅約30cm、深さ約15cm。黒褐色の締まった土層。出土遺物はなく時期は不明。ピットの埋土も溝と同じであろう。28トレンチで

写真１　確認調査風景



第８図　沖代地区条里跡　橋爪地区トレンチ図（S=1/1,500）

溝状遺構１条を検出した。幅約50㎝。深さは掘り下げてなく不明。29トレンチで溝は検出されないことから残存が不良か。33、35トレンチで溝状遺構を１条検出した。幅約50㎝、深さは掘り下げてなく不明。32、36、37トレンチは地山まで約1.5ｍ～２ｍと深く、暗褐色の泥土が堆積する。隣接地で字深町の地名があることや平成19年度の調査区でも同様のトレンチが確認されており（注1）谷状の地形が存在したことが推測される。

（注１）浦井直幸氏の御教示

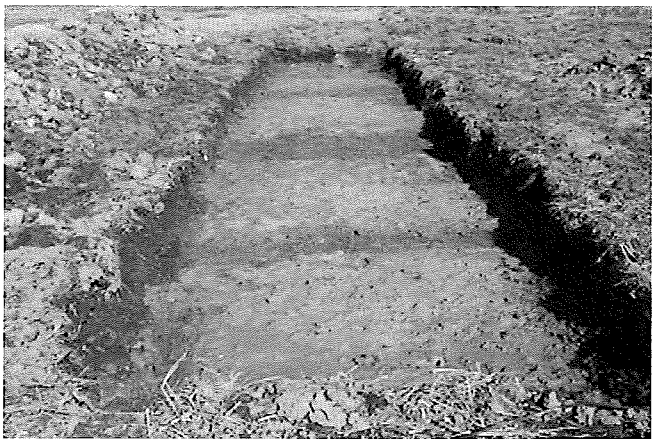
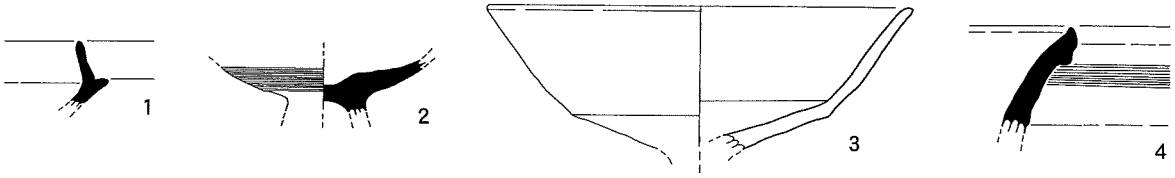
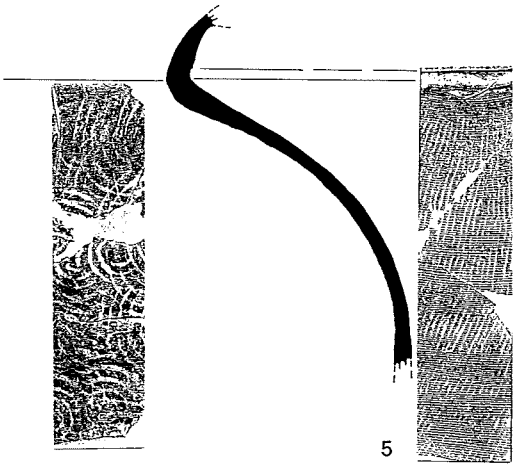


写真２　７トレンチ

写真３　11トレンチ





出土遺物

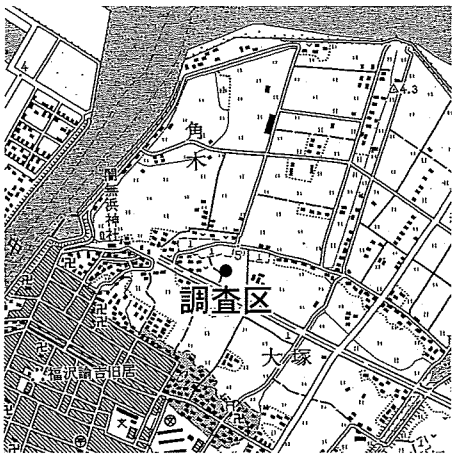
１は８トレンチから出土した須恵器の坏身である。２～５は９トレンチの溝状遺構検出面で出土した遺物。２は須恵器の高坏。坏部外面底部にカキ目を施す。３は土師器の高坏。復元口径16.8㎝。４、５は須恵器の甕。４は口縁部。５は胴部から口縁部。外面は平行タタキ後カキ目を施す。

第９図　沖代地区条里跡　橋爪地区出土遺物（S=1/3、５はS=1/4）

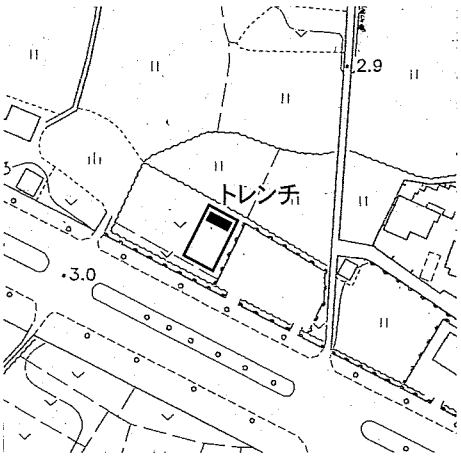
小結

調査区の北側で溝状遺構が検出された。溝からの出土遺物は古墳時代のものでこの時代に機能したものであろう。平成19年度隣接地で宅地造成に伴う確認調査が実施され今回と同様に溝状遺構が３条検出されている。今回の調査区北側で検出された溝状遺構とほぼ平行に走る。32、36、37トレンチで確認された谷状地形は平成19年度調査区でも確認され、溝状遺構とほぼ平行になる。溝は地形に沿って造られたものであろう。溝の性格を明らかにすることはできなかったが、本調査の資料を得た。

第３章　大塚西中野地区



第10図　調査区位置図（S=1/25,000）



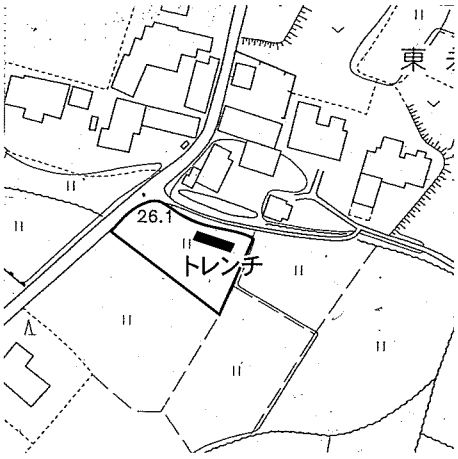
第11図　調査区位置図（S=1/2,500）

平成23年７月11日、株式会社浦松建設より中津市大字大塚299番１地内における携帯電話用鉄塔建設に伴う事前照会がなされた。工事地は周知遺跡外であったが、旧海岸線を把握することと合わせて試掘調査を平成23年10月27日に実施した。

調査区の標高は３ｍで、トレンチを１本設定して調査を行った。表土より下位は砂層で構成されて、60㎝掘り下げたところで湧水した。このため、遺構・遺物は存在しないと判断し調査を終了した。

第４章　永添玉迫地区

第12図　調査区位置図（S=1/25,000）

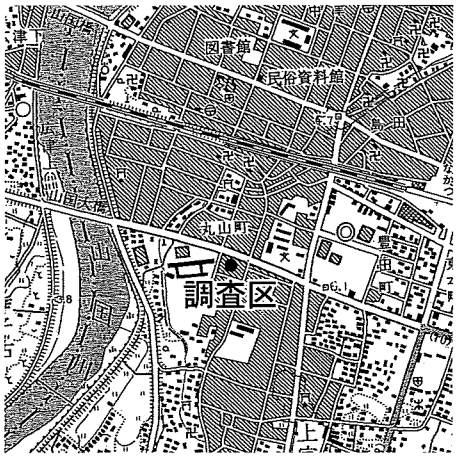


第13図　調査区位置図（S=1/2,500）

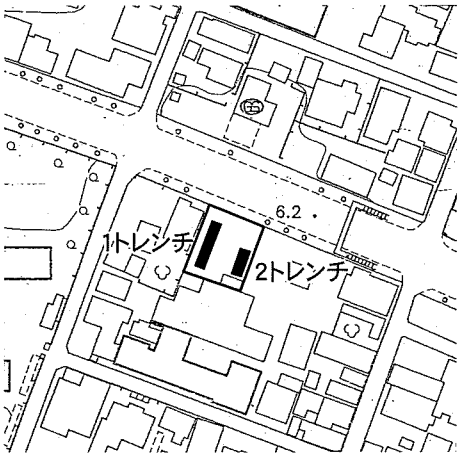
平成23年９月26日、中津市個人より中津市大字永添1629番地内における集合住宅建設に伴う事前照会がなされた。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、東側に長者屋敷官衙遺跡が周知されることから、試掘調査を平成23年10月27日に実施した。

建屋建設地に１本のトレンチを設定し掘削を行った。水田耕作土を除去すると黄褐色土が表れたがこの土は地山ではなく、さらに下位に存在した水田層を覆う層位であった。この水田層下位は黄褐色の地山で、切り下げられたような状況であった。このため、ある時期土地を地下げし、それをならして水田層を構築したものと判断した。遺構・遺物の発見には至らなかった。

第５章　高畑下ノ町地区



第14図　調査区位置図（S=1/25,000）

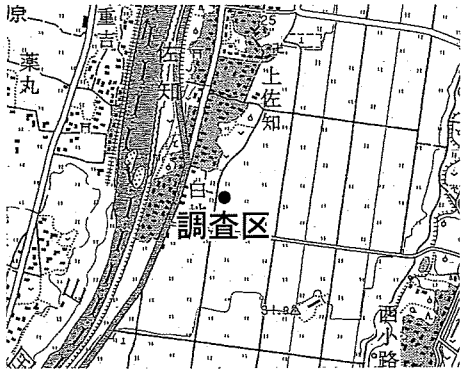


第15図　調査区位置図（S=1/2,500）

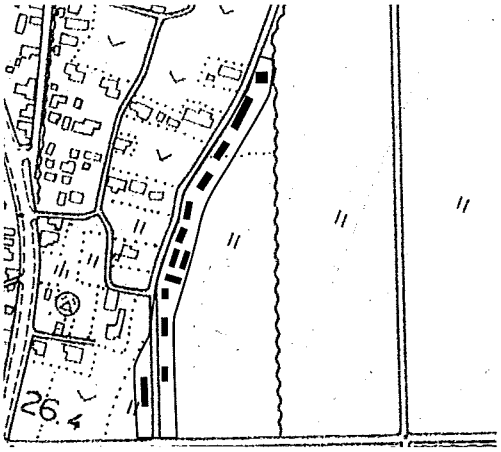
平成23年10月下旬、中津市個人より中津市栄町１丁目2091番地内における診療所建設に伴う事前照会がなされた。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、西側に縄文～古代の複合遺跡である高畑遺跡が周知されていることから、試掘調査を平成23年11月２日に実施した。

建屋建設地に２本のトレンチを設定し掘削を行った。地表面から１m下の黄褐色砂質土で近代の土坑を２基確認した。さらに1.2m掘り下げたが安定した地山の確認には至らず、川の運搬作用により堆積したと思われる層位を確認した。近代の遺構面直下から時期不明の土師器片を発見しているため、周辺の開発の際は注意を要する。

第６章　佐知遺跡



第16図　調査区位置図（S=1/25,000）



第17図　調査区位置図（S=1/4,000）

平成23年11月４日、中津市長より中津市三光佐知47番地他地内における市道拡幅工事に伴う文化財保護法94条の通知がなされた。照会地は佐知遺跡の東端にあたることから、確認調査を平成23年11月15日、16日に実施した。

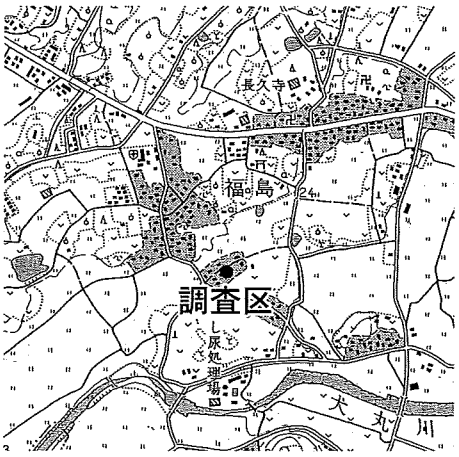
拡幅域に13本のトレンチを設定し掘削を行った。調査区北と南の黄褐色砂質土の地山において遺構を検出した。北では地表面から1.7m下で、南では50cm下で地山に至る。検出した遺構は、柱穴・土坑・溝で遺構密度は南が高い。クロボク層からは、縄文～古墳時代の遺物が出土している。調査区中央付近は遺物の出土を見るものの明確な遺構の発見には至らなかった。

今年度、本調査を実施することとした。

第７章　山中城跡（やまのなかじょうあと）

（1）調査に至る経緯

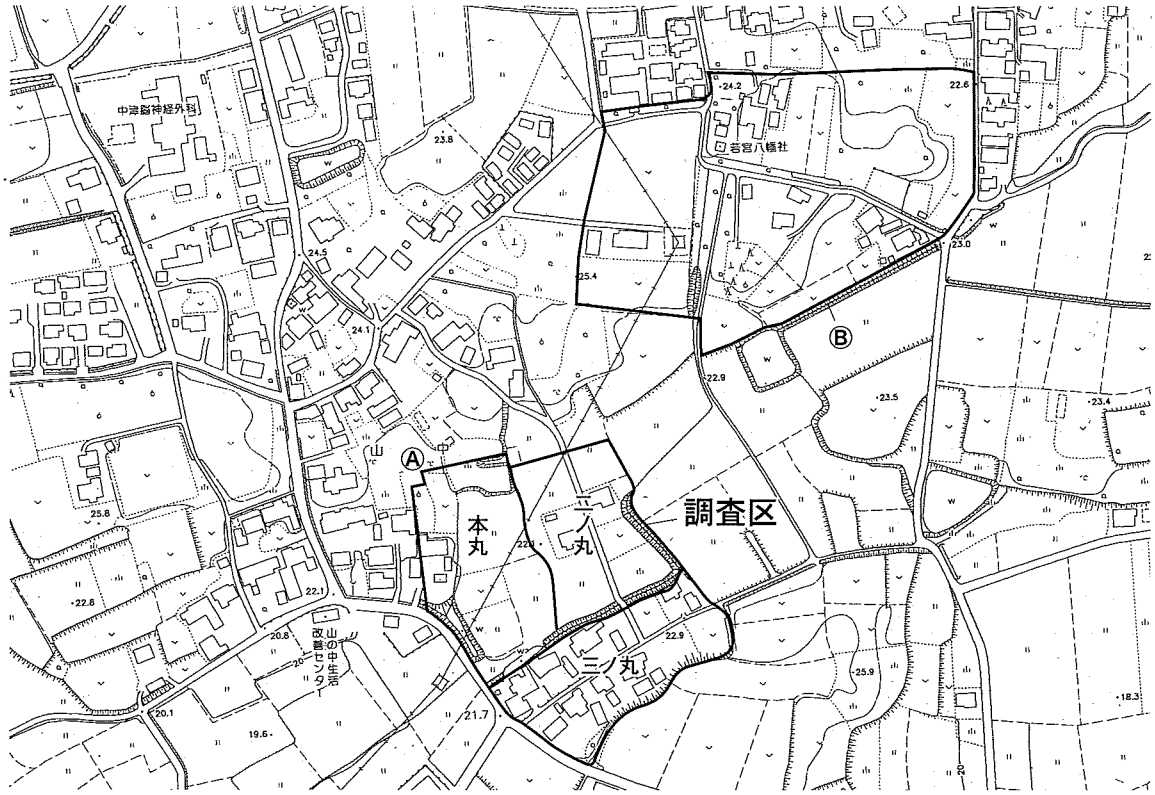
平成23年７月８日、中津市長より中津市大字福島1234-1他地内における水路改良工事に伴う文化財保護法94条の通知がなされた。照会地は山中城跡にあたり、水路は堀跡と推定されている。現在堀跡は農業用水路として利用され、水田面から1.5ｍ下は底となる。聞き取りでは50年程前まで堀跡には川魚が棲み、堀底は現況より深く、夏場は遊泳を行っていたとのことであった。工事は、水路底を約30㎝掘り下げU字溝を設置するもので、堀底・堀肩を破壊するものではなかった。しかしながら、将来的に堀の形状を把握する機会が失われることが危惧されたため、その確認を目的として平成23年11月21～22日に確認調査を実施した。



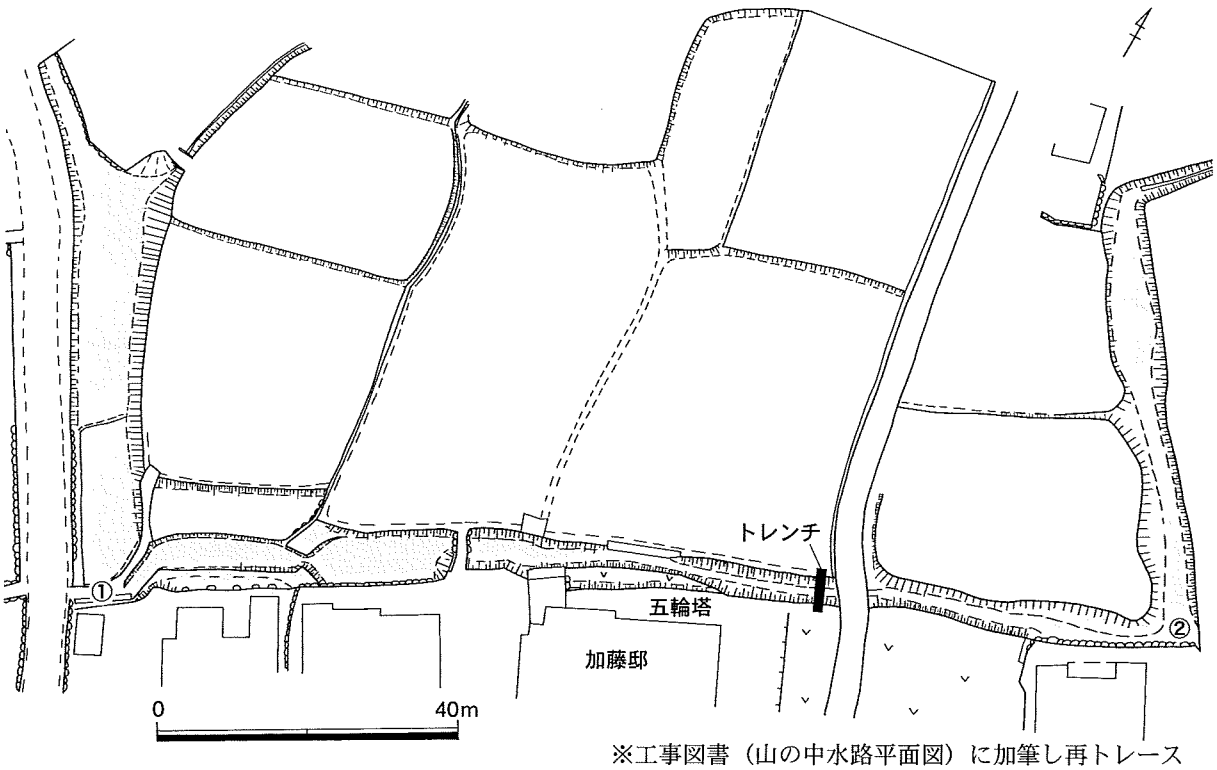
第18図　調査区位置図（S=1/25,000）

（2）周辺の状況

山中城跡が所在する福島地区は中世城館が集中する地区として知られる。地区の小字には「殿山」「外新屋敷」「新屋敷」などの城館関係地名が多数存在する。また、長久寺や妙相寺にも堀・土塁が残る。山中城跡は別称福島城とされ「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」の小字が残る。高所のⒶ付近が本丸跡との伝承もある。[1] 一方、山中城跡の比定地は、城から北東50ｍの若宮八幡社一帯とも指摘されている。[2] ここはⒷ地点など明瞭に堀跡が残り、今年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが行った



第19図　調査区周辺図（S=1/2,500）



※工事図書（山の中水路平面図）に加筆し再トレース

第20図　山中城跡堀測量図（S=1/1,000）

県道改良工事に伴う発掘調査でも堀跡が確認されている。

山中城跡は『豊前故城誌』[3]によると、天慶の頃、藤原純友征伐のために福島四郎長久が築き、文明９年（1477）、但馬守祐斉の代で田丸の城に遷り、天文の頃（1532～1555）は深水（ふこうず）兵庫介景氏が居たという。田丸の城とは長久寺城を指すと思われ、福島氏が福島城（山中城）から田丸城に遷った時期は、文明９年と天文９年（1540）の２説がある。

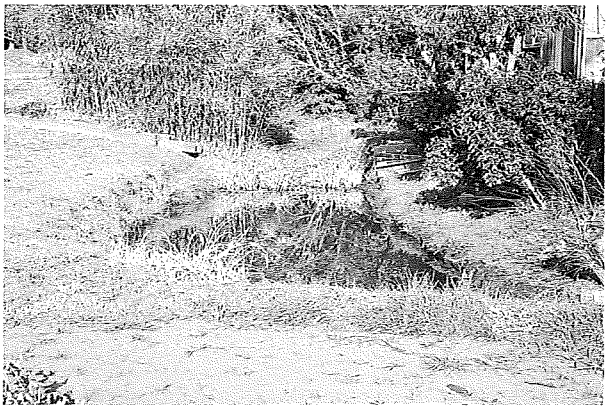


写真４　①堀跡状況（西から）

（3）調査の概要（第20図）

堀は小字「二ノ丸」と「三ノ丸」の間を走る。調査と併行して周辺の測量調査を行った。

調査の結果、堀は「本丸」「二ノ丸」を方形に囲むように東・南・西に設けられていることを確認した。現況では東堀は長さ60ｍ、最大幅７ｍ、南堀は長さ150ｍ、最大幅6.5ｍ、西堀は現況で長さ55ｍ、最大幅15ｍを測る。

トレンチは南堀の調査可能な箇所に１本設定

写真５　②堀跡状況（東から）

し、堀の形状確認を行った。南側堀肩は立木の影響で小範囲の掘削にならざるを得ず、堀底は流水していたため掘り下げを行わなかった。このため、西側堀肩の検出に努めた。その結果、明確な堀肩の検出には至らず、地山の傾斜を確認した（５層）。この上位には15世紀代の遺物が出土した３層が堆積しており、現状では５層が堀開削当初の傾斜であり、その後、２・３層が中世に、１・２層が現代までに堆積したものと考えた。よって、堀肩は調査を行っていない北側水田層下位に存在する可能性が高く、堀幅は現況より広かったものと思われる。

第22図は３層出土遺物である。１は瓦質土器鍋の口縁部片で15世紀代前半代か。色調は暗灰色を呈する。２は瓦質土器鍋の口縁部片で、胴部外面は工具ナデを施す。色調は内面灰褐色、外面暗茶褐色で被熱による煤が付着する。３は土師質の土錘である。角閃石・長石が多量に混入する。

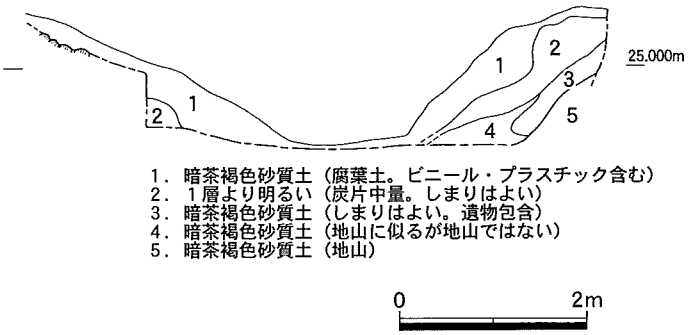
このほか、第20図の小字「三ノ丸」の加藤邸裏庭で五輪塔を確認した。火輪が４点存在することから少なくとも４基造立されていたものと考えられる。年代はいずれも戦国時代の作と思われ、石材は凝灰岩を使用している。

注

(1) 大分県教育委員会『大分の中世城館』2004

(2) 中村修身「中津市福島城の紹介」『北部九州中近世城郭情報誌10』2006

(3) 熊谷克巳『豊前故城誌』1903



第21図　トレンチ土層堆積状況（S=1/80）

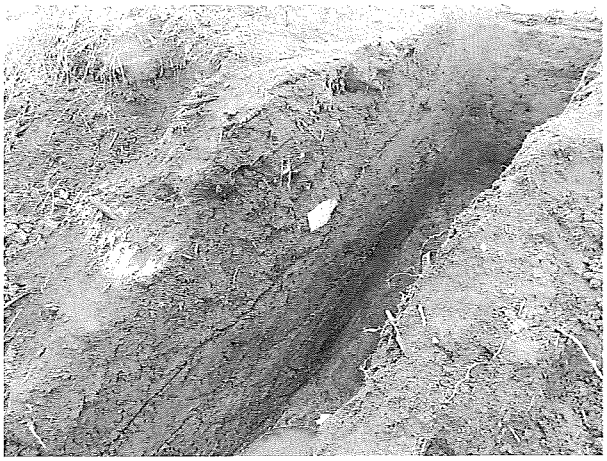
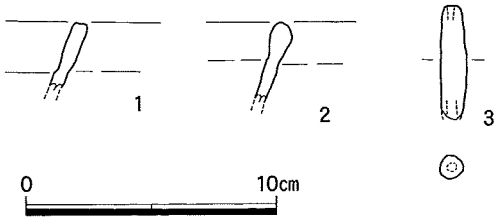


写真６　土層堆積状況



第22図　出土遺物（S=1/3）

写真７　三ノ丸地区五輪塔群

第８章　中津城　三ノ丁おかこい山

１．調査に至る経緯

中津城は、山国川が周防灘に流れ込む河口近くに位置する城で、川が城の西側を守る自然の堀となっている。三角形の本丸敷地の北東に二の丸、本丸南側に三の丸を配し、その外には中堀・外堀がめぐる。南から北へ流れる山国川の水を引き込んだ堀の水は、二の丸北端の北門橋付近で川へと帰る。

城下町は川に面した西側を除き、周囲を堀と土塁で囲む惣構のつくりである。城下町を囲む惣構の土塁は近世初期の城郭でよく見受けられるが、その後の開発で全国的に破壊が進んだ。九州の城郭では、中津城のみが惣構の土塁の一部を残している。

中津城の土塁は、文献では「お囲い」「囲いの山」等の名称で認められるが、現在地元では「おかこい山」とよばれているため、遺跡の名称を「おかこい山」とした。現在６箇所で確認されており、自性寺から金谷口にかけて、金谷口の東側、三ノ丁の民家の庭（２箇所)、寺町の大法寺と本傳寺の境、鷹匠町の市有地に残っている。この内、自性寺寺域内のおかこい山は県指定史跡、その続きで自性寺から金谷口にかけては市指定史跡、鷹匠町も市指定史跡である。

三ノ丁の地域は、江戸時代の三の丸で、家老級の武家屋敷が並んでいた。そのうち、現存するおかこい山は歯科の庭にあり、歯科をはじめ並びの家々は、かつての堀を埋めた場所に建っている。堀は幅を狭めて水路として生きており、おかこい山は堀跡の北側にあたる。

中津市では、これまで随時おかこい山を調査し、指定を行ってきた。今回、三ノ丁おかこい山を調査したのも、文化財の保護を目指してのことである。

（三ノ丁おかこい山は城下町を囲む外周沿いにあるわけではなく、『惣構の土塁』とは区別すべきであるが、構造が同じであり、『おかこい山』の呼称も同じであることから同一としてとりあつかっている）

２．調査の概要

当地は破壊される恐れのない場所であることから、トレンチ掘りは行わず、平面、断面を測量するのみにとどめた。長さは東西に約32ｍ。大半は土塁であるが、そのうち西端約４ｍは石垣で出角となっている。

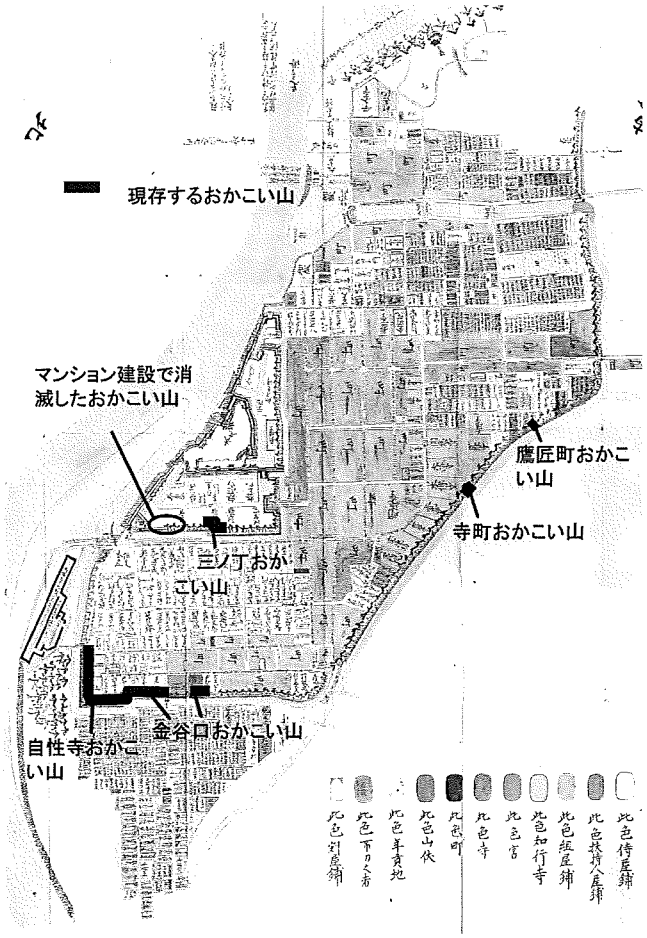
幕末の中津城下絵図には石垣の上に南北棟の平櫓が描かれており、この石垣はその櫓台にあたるものであろう。絵図によっては二重櫓として描かれているものもある。現在判明している最も古い絵図は寛文３年（1663）以前に描かれた「中津城総曲輪絵図」であるが、そこにも平櫓が描かれている（第24図)。

この絵図は現物を見ることができず、写真と復元図のみしか確認できていない。原図には堀の大きさを表していると思われる数字が記されているが写真の写りが悪いため判別しづらく復元図には記入されていない。復元図によると、おかこい山の長さは「東西間数弐百間」（約364ｍ)、「土手根幅八間高サ八尺」（幅約14.5ｍ、高さ約2.4ｍ）とある。測量の結果、現在の三ノ丁おかこい山は基底部幅約8.75ｍ、高さ約内側2ｍ、外側4.2ｍ。頂部は平坦ではなく、高低差があった。絵図に記されているサイズより、幅は狭くなり、高さも低くなっている。自性寺おかこい山は基底部約16ｍ、高さは内側が約4.1ｍ、外側が約5.3ｍ、金谷口おかこい山は土塁基底部幅が約15.6ｍ＋α、高さが

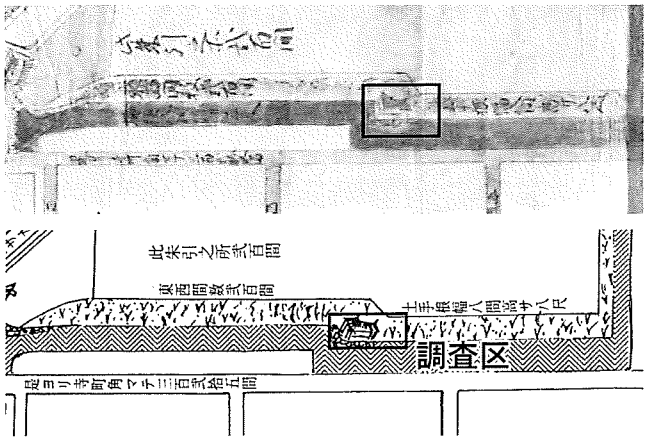
2.59m～4m＋α、鷹匠町おかこい山は基底部約9m、高さ約1.5mであった。

櫓台の石垣は歯科の建物の下にはいりこんでおり、測量するには足場をくまないと難しかったため、今回は等高線を回すだけにとどめた。石垣はかなりつみなおされているが、下部は古い状態が残っているようである。

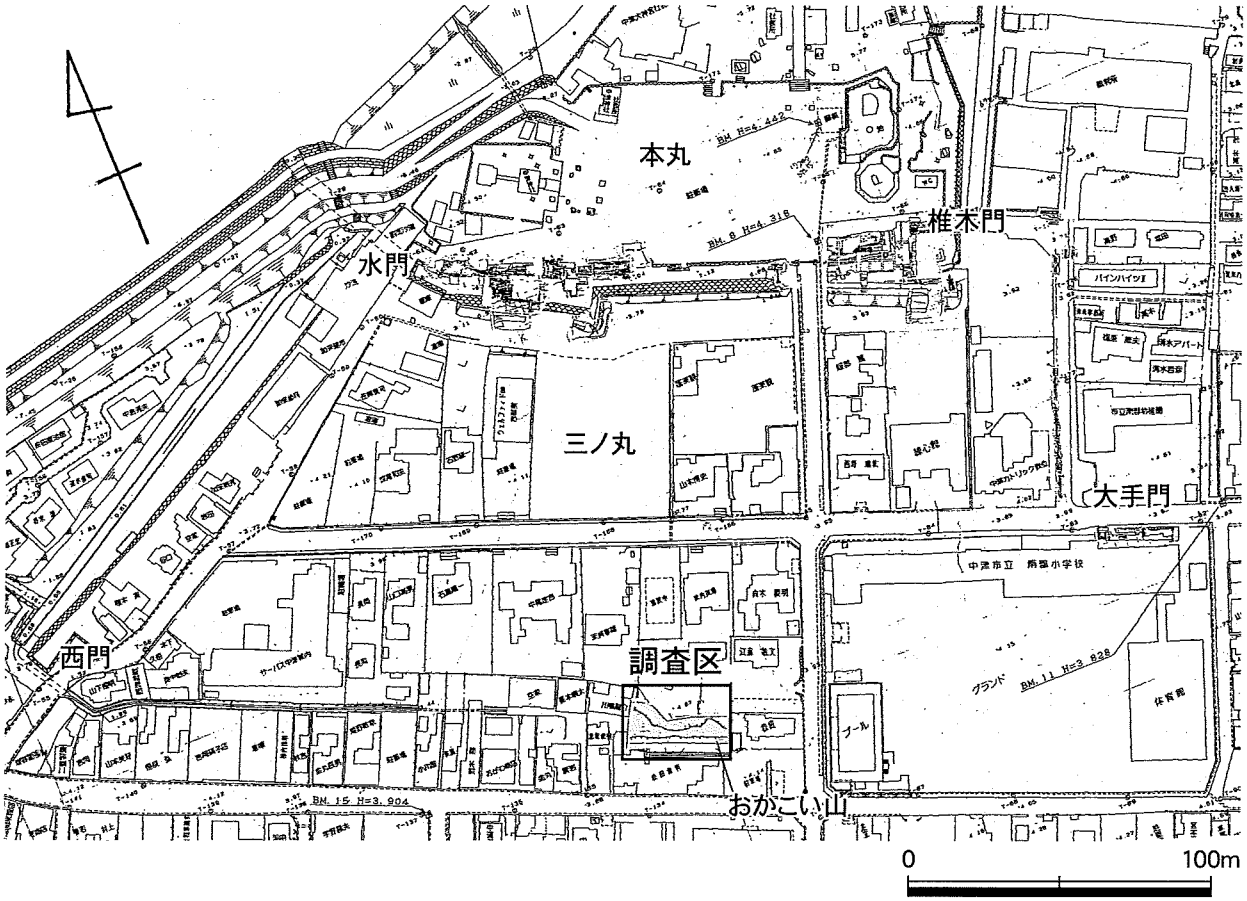
惣構の土塁だけでなく、絵図に描かれた櫓台の石垣も現地で確認でき、興味深い資料となった。しかし、現地は歯科医院の庭であり、通常はおかこい山を診察室の窓ガラスごしにしかみることができない。



第23図　現存するおかこい山分布図



第24図　「中津城総曲輪絵図」に見る三ノ丁おかこい山

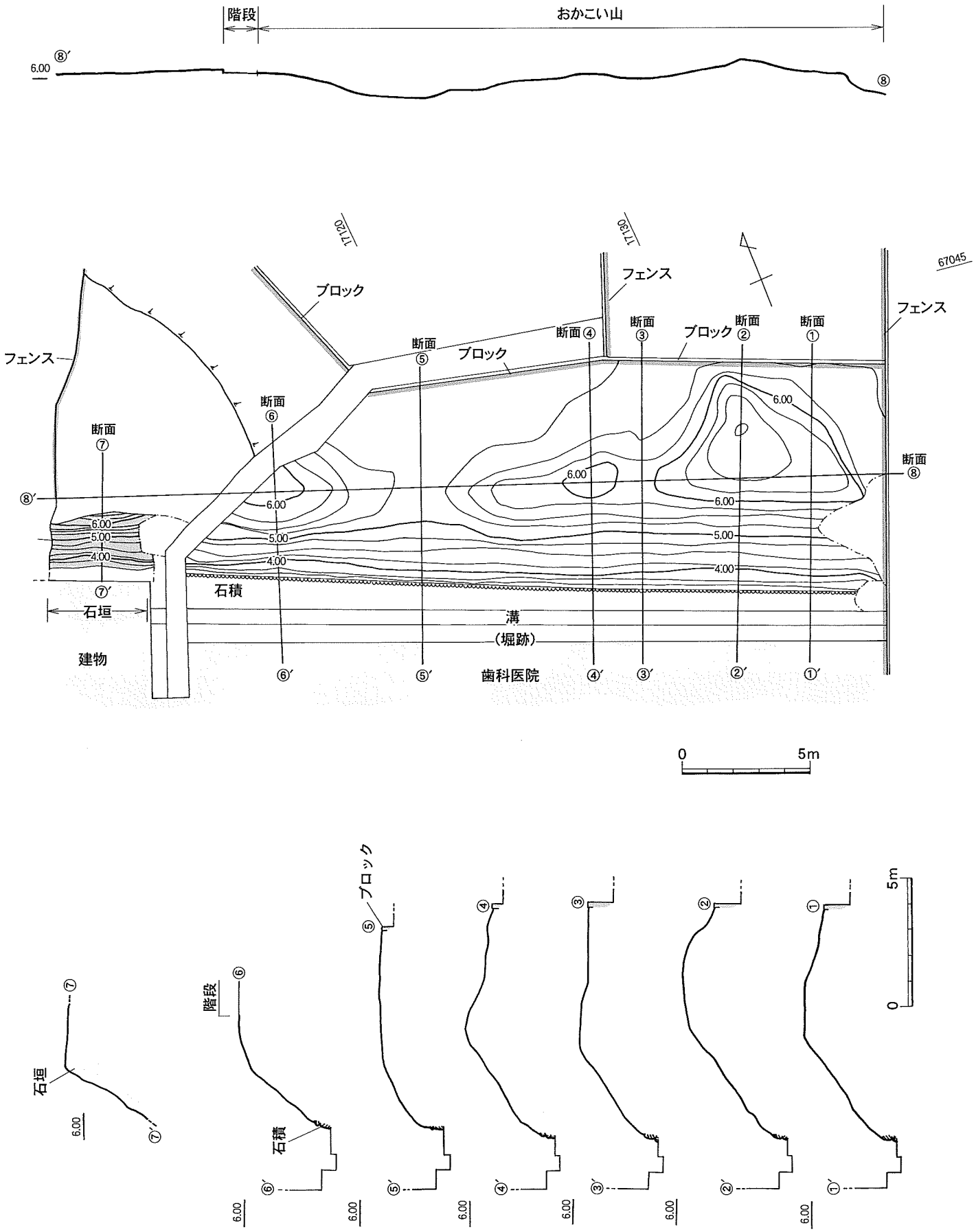


第25図　調査区位置図（S=1/2,500）

写真８　おかこい山現況図

写真９　おかこい山と堀跡の水路

写真10　おかこい山に残る櫓台跡



第26図　おかこい山平面図・断面図（S=1/200）

第9章　古代豊前道跡

1．調査に至る経緯

県道万田四日市線は推定古代官道跡である。沖代条里の南限ラインを踏襲しており、東西方向にまっすぐにのびる県道は往時の面影を残す。西は福岡との県境の山国川から方向を北寄りにかえ、豊前国府を目指す。東はそのまま直線でのばすと宇佐神宮の古代参道へとつながっており、宇佐神宮を目指して測量された道であることがわかる。

しかし、直線を基本とした官道も、地形の制約をうけたり、後世の人々によって曲げられたりしている部分も多く、本来の直線のライン上を発掘すると古代の道路が検出されることがある。

当地は直線道が残る沖代平野から東に12m上の台地である。ここから道路は屈曲するのだが、以前より本来の直線に近い場所にある畑の段落ちが官道の直線道の痕跡ではないかと注目されていた。県道沿いの民家の裏手には平坦なスペースが畑として利用されており、その北側に1.1m高く別の畑がある。この畑の段落ちラインを測量し、本来の官道となるのか確認することとなった。

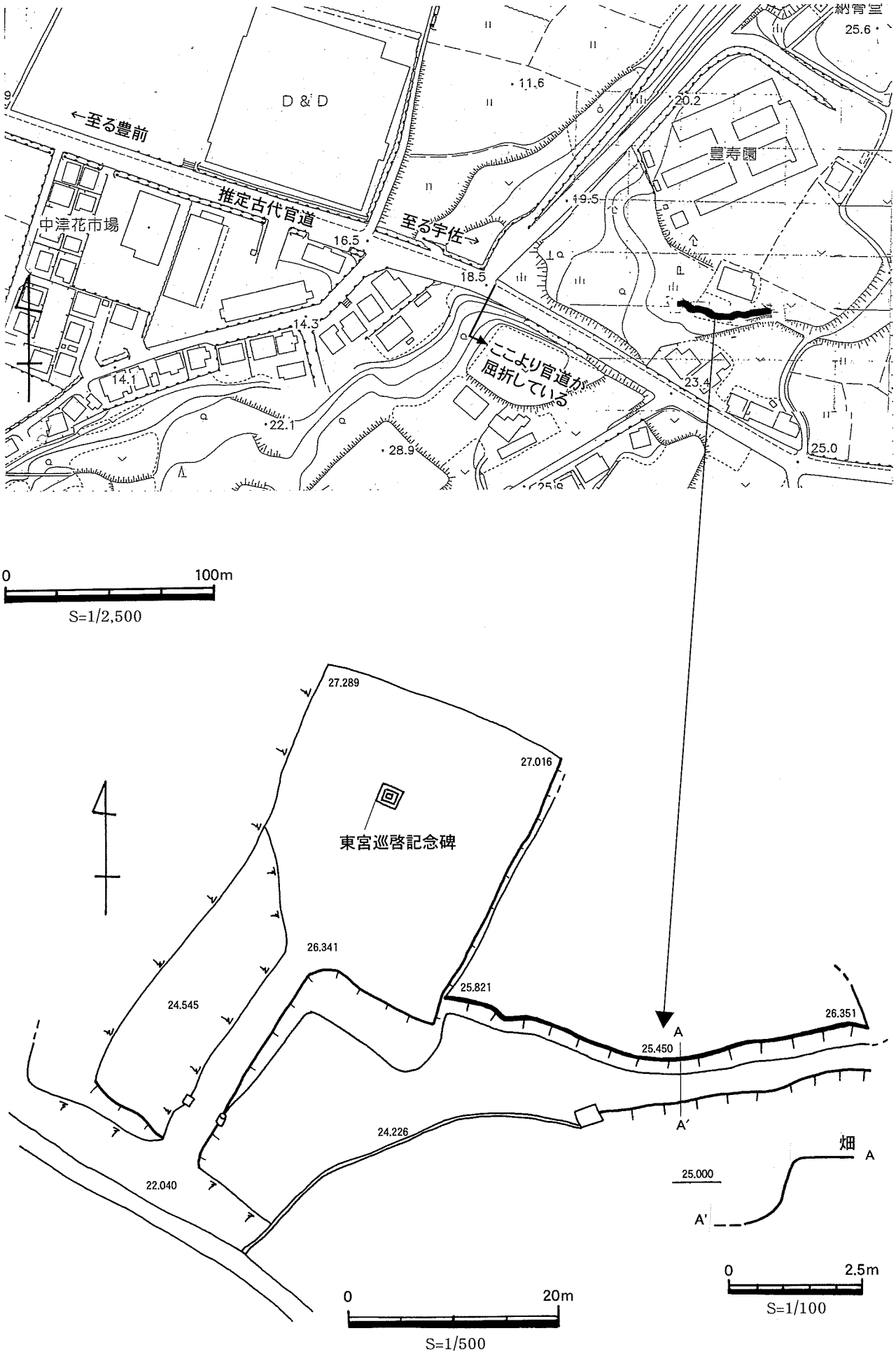
2．調査の概要

調査はまず地形測量を行うこととした。上の畑の段落ちのラインは長さ40m、標高は25.6mで、下の畑の標高は24.5mである。下の畑は狭いところで幅3.6m、広いところで幅9mほどである。

調査区の西側は土地が高くなっており、北側に斜面を登ると「東宮巡啓記念碑」が建っている。その上り坂と畑地の間は鬱蒼と雑木が茂り、官道を見通しにくくなっていた。今回の調査に伴い最低限の雑草を伐採したところ、「東宮巡啓記念碑」へのぼる斜面の断面が露出する場所があった。断面は盛った土ではなく、山肌が露出していると見え、畑の段落ちを官道跡と考えた場合、この場所に山肌が立ちふさがるのは不自然である。記念碑へのぼる斜面は盛ったのではなく、斜面の両端を後世に削り落としたものではないかと思われる。よって、測量した畑の段落ちは官道の切り通しとは関係ないものではないかと考え、下の畑に確認トレンチを入れる計画は中断し調査を終了した。

写真11　調査区から官道沿いに西を望む

写真12　調査区　下の畑から上の畑の段落ちを望む



第27図　古代豊前道跡調査区平面図・断面図

第10章　長者屋敷官衙遺跡・八並城跡

1．調査に至る経緯

長者屋敷官衙遺跡は古代下毛郡衙正倉跡と推定される遺跡である。平成７年、中津市大字永添の市営住宅建て替えに伴う調査で発見された。以前から大量の炭化米の出土が確認されている場所で、掘立柱建物跡、礎石建物跡あわせて14棟の大型建物跡が検出された。平成22年２月22日、国指定史跡に指定された。しかし、周辺にまだ関連遺構が展開する可能性があるため、確認調査を継続している。また、長者屋敷官衙遺跡と重なって、中世の八並城跡の遺跡も存在する。確認調査及び開発に伴う調査で八並城関係の遺構が検出される場合も多く、調査区名を連続させることとした。(第28図)

2．長者屋敷官衙遺跡

(1) 調査の概要

これまでの調査では、建物群（第29図１区）は溝に区画された約90ｍ×120ｍの範囲で確認されている。過去その周辺からも炭化米が出土しており、平成８年には１区建物群の南から南限の溝SD-13を、平成12年には建物群の東側から建物群と同時期の不明土こうSX-21を検出した。今後さらなる遺構の展開が予想される。将来国指定地の整備を行う上で、遺跡の範囲確認は緊急の課題である。今年度は国指定地隣接地に市道新設が検討されたためトレンチを設定して確認調査を行った。

(2) ４区

国指定地の北東隅に隣接する畑は年中耕作が行われているが、土地所有者と地元区長の多大なるご協力により、確認調査を行うことができた。

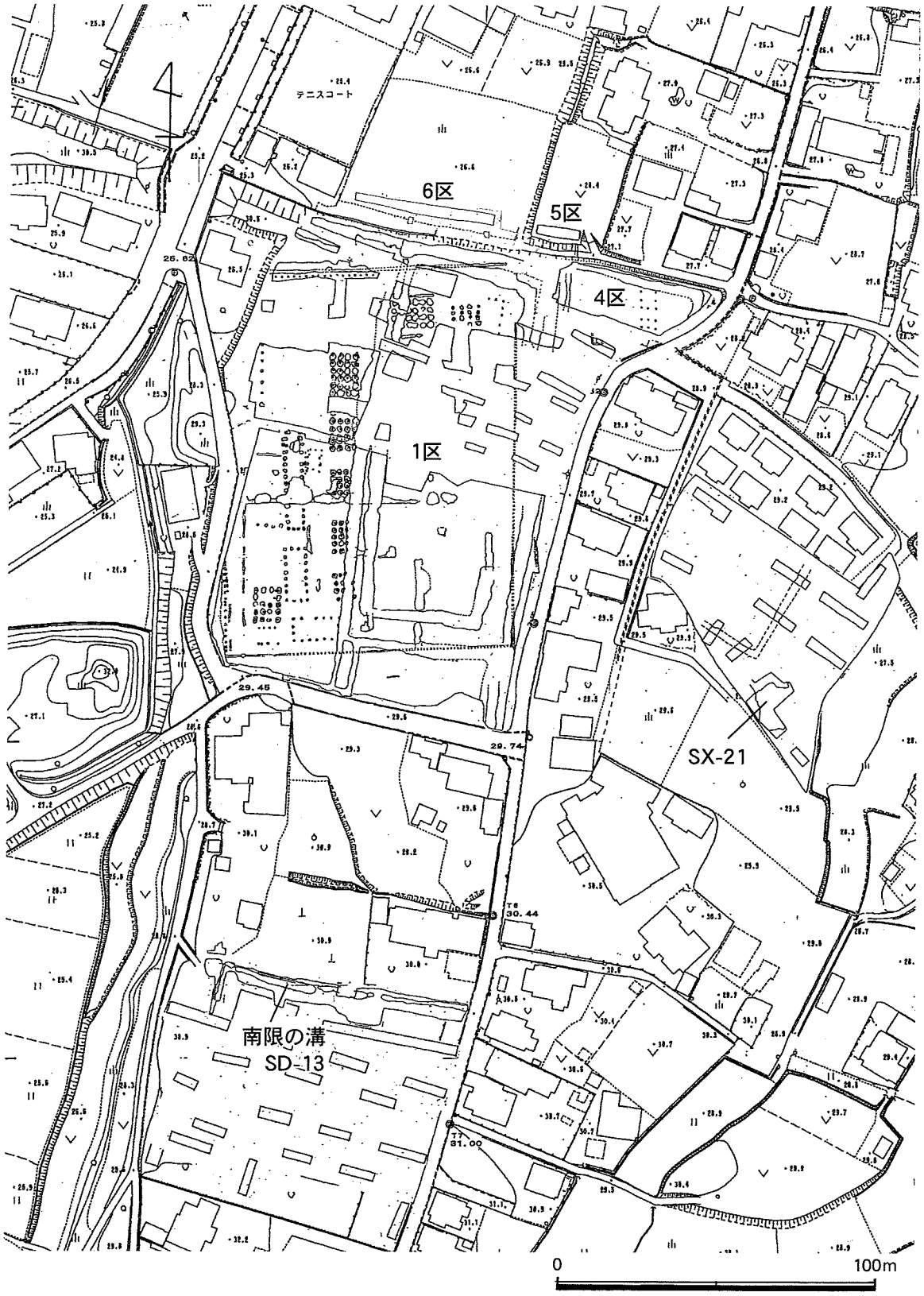
土地は南北約18ｍ、東西約54ｍと細長く、西と南は国指定地、北と東は道路に面して一段高くなっている。耕作期の都合上、土のやりくりが必要となり、二度にわけて調査を行った。

その結果、二棟になるのであろうか、掘立柱建物４区SB-1、２を検出。掘立柱建物に平行する溝４区SD-1 一条、その溝を切る大きな溝SD-2 一条を検出した。

SB-1、２とも直径約45㎝のピットが国指定地の建物群と方位を同じくして並ぶ。４区SB-1は梁行は4.5ｍで、２間。柱間は約2.25ｍ。北側が八並城の堀にカットされ、その先は台地が落ちていることから全体規模はわからない。SB-2は、梁行約4.5ｍ、２間。柱間は約2.25ｍと、SB-1と同じ。SB-1と方位を同じくするが、調査区外にのびているため全形は不明。総柱建物の可能性がある。いずれのピットも小さく、国指定地の建物と比べると貧弱だが、方位が国指定地のものと合うことと、建物の西端にやはり方位を同じくする溝SD-2が南北方向に走ることから、正倉域の建物群と関連した古代遺構の可能性が高い。

SD-2は幅約1.5ｍ、深さ約45㎝の断面逆台形。南北方向にのびるが、北はSD-1に切られ、南は調査区外にのびる。SD-1は地形に沿うように、調査区の西、北、東の縁辺を囲む。北側の溝幅は約1.3ｍ～1.65ｍ、西側は調査区外にかかるため溝幅は不明だが、北側よりも幅広く、断面Ｃでは検出した部分だけでも幅約2.1ｍ以上、深さ約1.5ｍと大きい。SD-1は過去の調査でも検出してきた中世八

第28図　長者屋敷官衙遺跡平面図（S=1/2,500）



第29図　長者屋敷官衙遺跡平面図

並城の堀であろう。

国指定地内で検出された北限の溝は、幅約1.0m、深さ約45cmで内側に柵列を伴う。正倉域の建物群を囲む90m×120mの区画施設は、北と西に柵列、北の溝が幅約1m、西側は八並城の堀で溝の有無は不明である。北と西が比較的しっかりしているのに比べ、東と南からは幅約40cmの貧弱な溝状遺構しかない。4区SD-1が古代遺構で建物を囲む区画施設だとすると、①4区SB-1、2のある東側を囲む、②1区の北限溝と連続して1区の建物群を囲む、の二つの場合が考えられる。今後は、SD-1 の性格付けが重要となってくるため、国指定地内ではあるが4区SD-1 の南側を精査する必要があるのではないか。

国指定地内の建物群は一つのまとまりとして完結するものであるが、過去の調査で南側や東側から同時期の溝、土壙、炭化米が確認されている。1区の建物群と比して小規模な柱穴を持つ4区SB-1、2の性格と周辺への遺構の展開を解明するため、今後も周辺の確認調査を継続していく方針である。

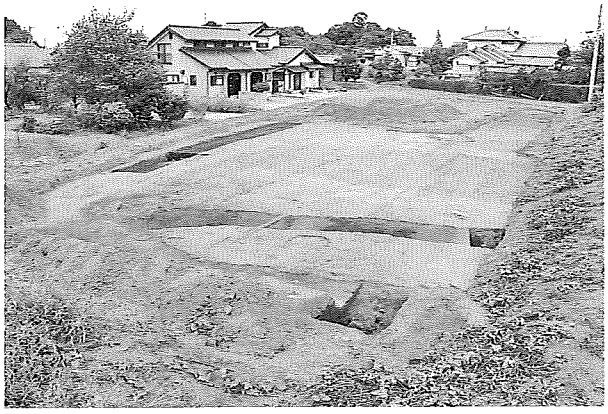


写真13　4区斜景（西→東）

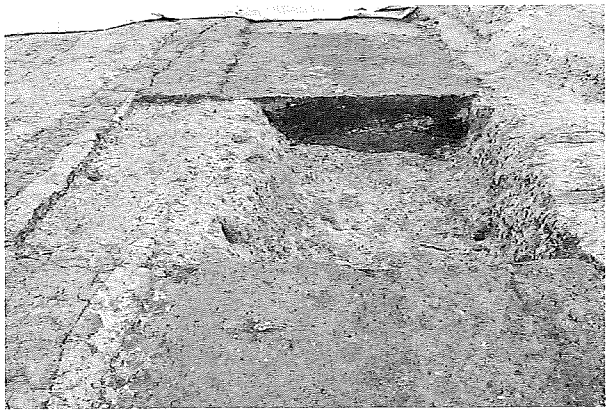


写真14　4区SD-2断面A（東→西）

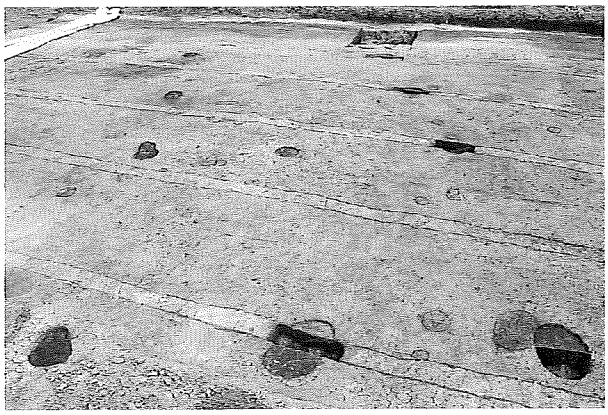


写真15　4区SB-2からSB-1を望む

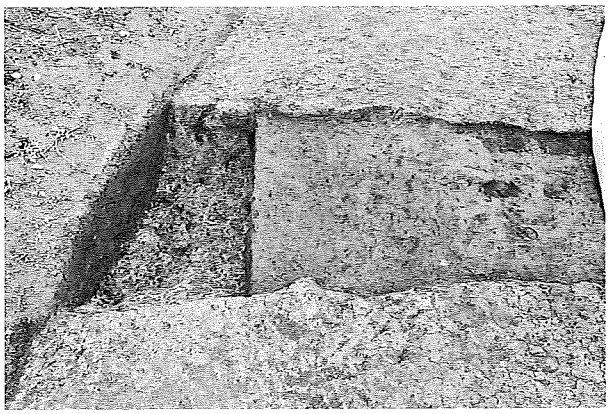
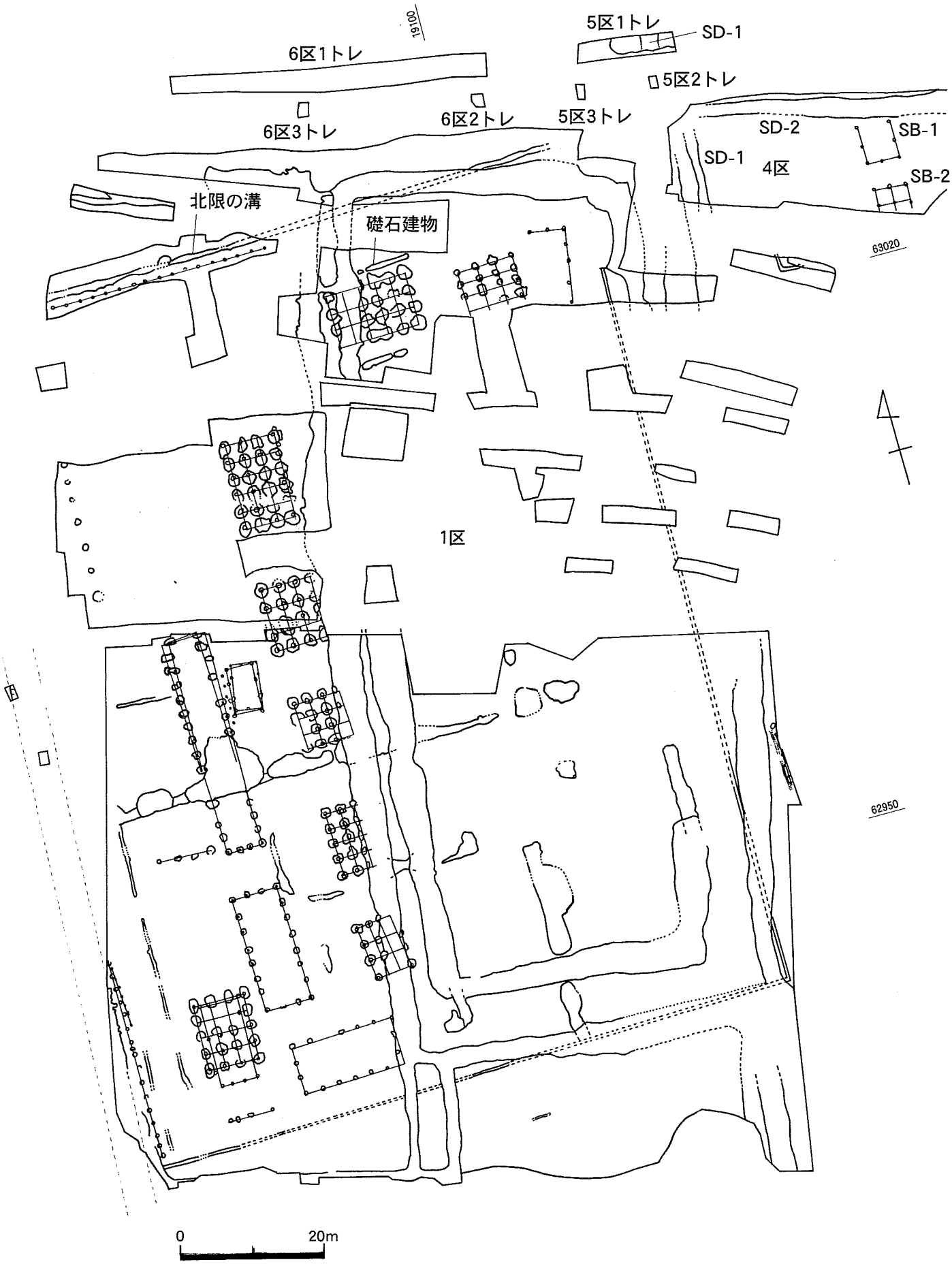
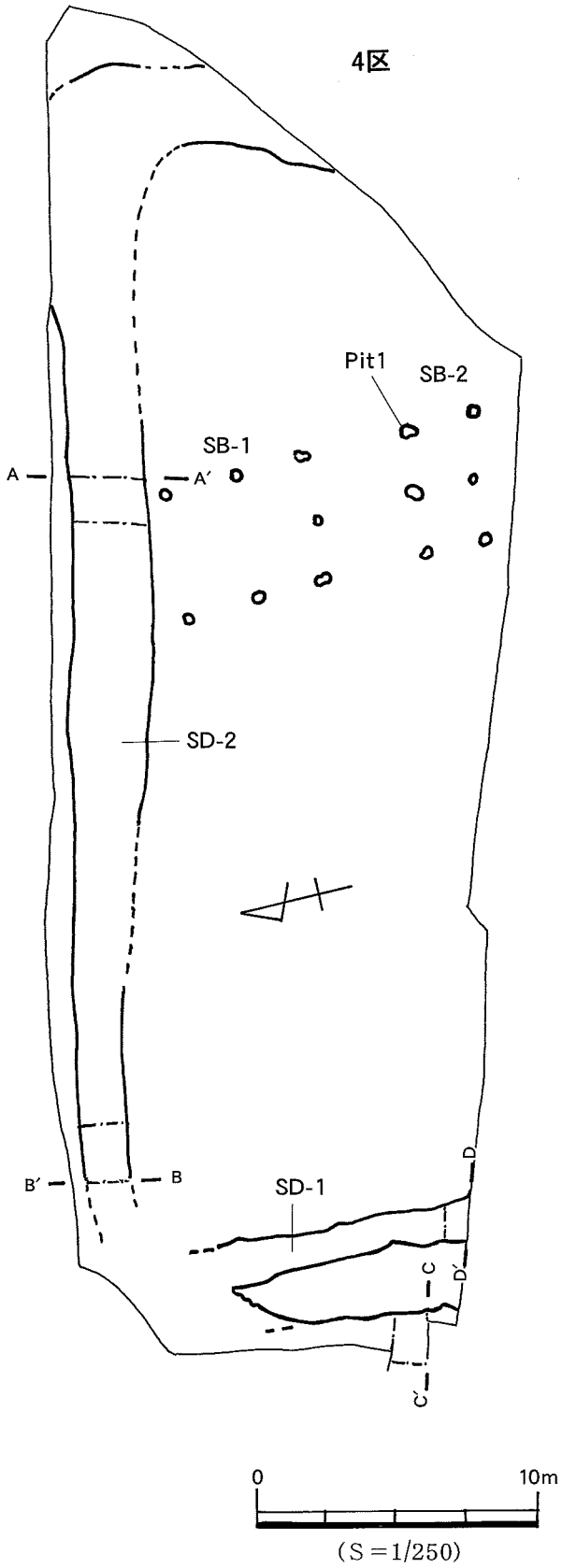
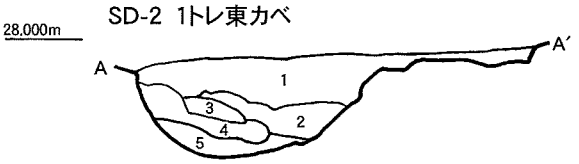


写真16　4区SD-1断面D（東→西）

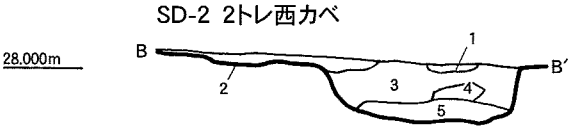


第30図　長者屋敷官衙遺跡全図（S=1/700）

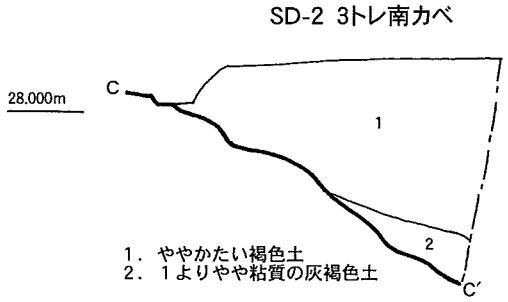




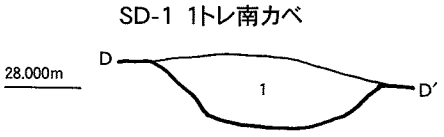
1．やわらかい暗灰色、黄色の粘土ブロックが少し入る
2．きめの細かい灰色土
3．きめの細かい暗灰色土、黄土粒が混じる
4．きめの細かい黒色土
5．やわらかい灰色土に黄土ブロックが混じる



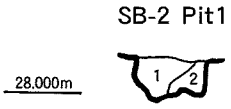
溝の埋土
1．暗褐色土（撹乱の耕作土）
2．褐色土（黄色粘土混じり）
3．やわらかい暗黒色土
4．黄色粘土ブロック（3の層）
5．やわらかい淡褐色土



1．ややかたい褐色土
2．1よりやや粘質の灰褐色土



1．ややかたい褐色土



1．ややかたい黒褐色土
2．ややかたい黄褐色土に5～6㎝位の黒褐色土のブロック混じる

0　1m
(S＝1/50)

第31図　長者屋敷官衙遺跡遺構図

(3) 5区・6区

5区は長者屋敷官衙遺跡国指定地の北側に隣接する土地である。現況は里道と畑であるが、以前より地元から市道新設の要望が出ており、遺跡確認調査を行うこととした。

5区1トレは標高約28.5mの畑で、里道面より約1.5m高い。遺構は南北方向の溝SD-1のみである。SD-1は幅約2m、深さ約70㎝、一部断ち割ったが、遺物は一点も出ず、時期は不明であった。SX-1はトレンチの縁辺を西から南にめぐっており全形は不明。粘土質の黄土や黒色土など、土が混ぜられ、硬く固められていた。表面にゴミが埋まっているのが確認できており、畑を平坦に造成した痕跡ではないかと思われる。SD-1は調査区外にのびており、1区の北東部で検出された八並城の堀の延長であろう。

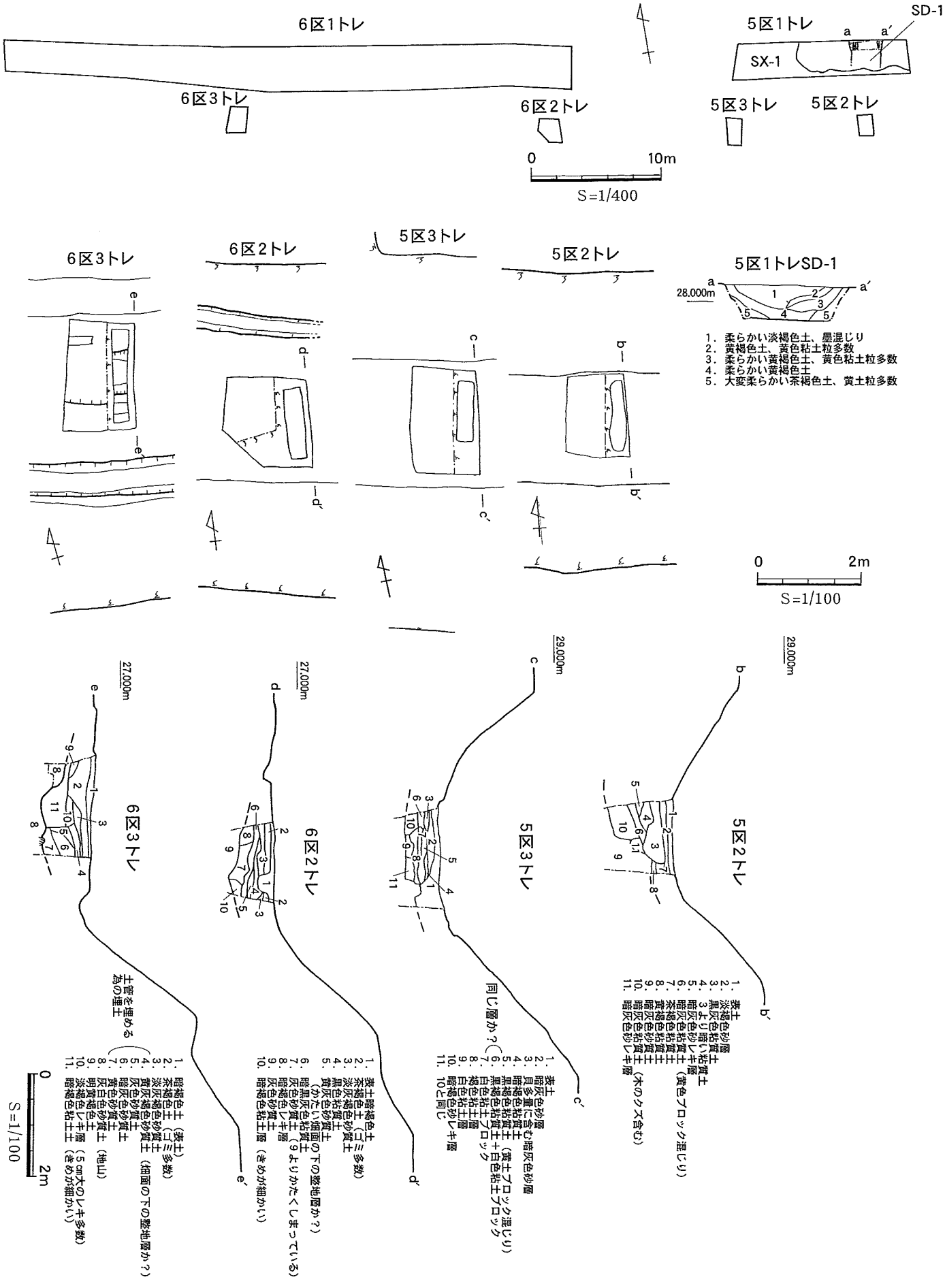
5区では、1トレンチ以外に、里道にも2箇所小さなトレンチを設定した。この里道部分は、八並城の堀跡と推定されている。地元の方々によれば、戦前から国指定地内には大きな堀が口を開けており、この里道部分も、堀として認識されていた。雨がふらなくとも常に地下水位が高く、水たまりができている。トレンチを掘削するのも水を抜きながらの作業となった。

5区2トレンチは1.4m×1m、深さ約1.43m、5区3トレンチは1.2m×2m、深さ約70㎝で、トレンチの底の地山面が八並城の堀底であろう。近代のゴミが底近くまで埋まっていた。

6区1トレンチは、東西の長さ44m、南北3m。こちらも5区同様、市道新設の要望がでていたため、遺跡確認調査を実施した。しかし、地表面から20㎝程度で地山面に到達し、遺構遺物とも発見できなかった。現況は標高約26m～26.5mの畑で、過去1m以上土地を下げたと聞き取りできていることから、もし遺構があってもすでにカットされている可能性が高い。

6区2トレンチは1.6m×2m、深さ約90㎝。6区3トレンチは1.6m×2m、深さ約1.1m。5区の2トレンチ、3トレンチと同様、現在は里道で八並城の堀跡だったと思われる場所であり、地下水位が高く、ゴミが埋まっていた。

以上、5区、6区では古代の遺構、遺物とも確認できなかった。



第32図　長者屋敷官衙遺跡図（S=1/100、1/400）

写真17　４区と５区の間の里道（東→西）

写真18　５区２トレンチ掘削状況

写真19　５区SD-1（東→西）

写真20　５区２トレンチ（北→南）

写真21　６区１トレンチ（東→西）

写真22　６区３トレンチ（南→北）

2.八並城の調査

(1) 八並城の歴史

八並城は「下毛郡誌」によれば、「小城蔵人宗次（本姓は臼杵）によって築かれた。天文元年（1532）、蔵人宗次は大友出陣に従い豊前国永添村小城に住した。このとき小城甲斐守が大内の命に背き、小城を横領した。宗次は甲斐守を撃って八並城を築き、小城を領し小城と称した」という。天正８年(1580）、八並城は豪族野仲鎮兼に攻め落とされた。天正15年（1587）、秀吉に豊前を与えられた黒田孝高は翌16年（1588）に中津城を築城した。孝高の息子長政は黒田氏に従わない地元豪族達を次々に撃ち野仲氏も滅ぼされた。

(2) ７区調査の概要

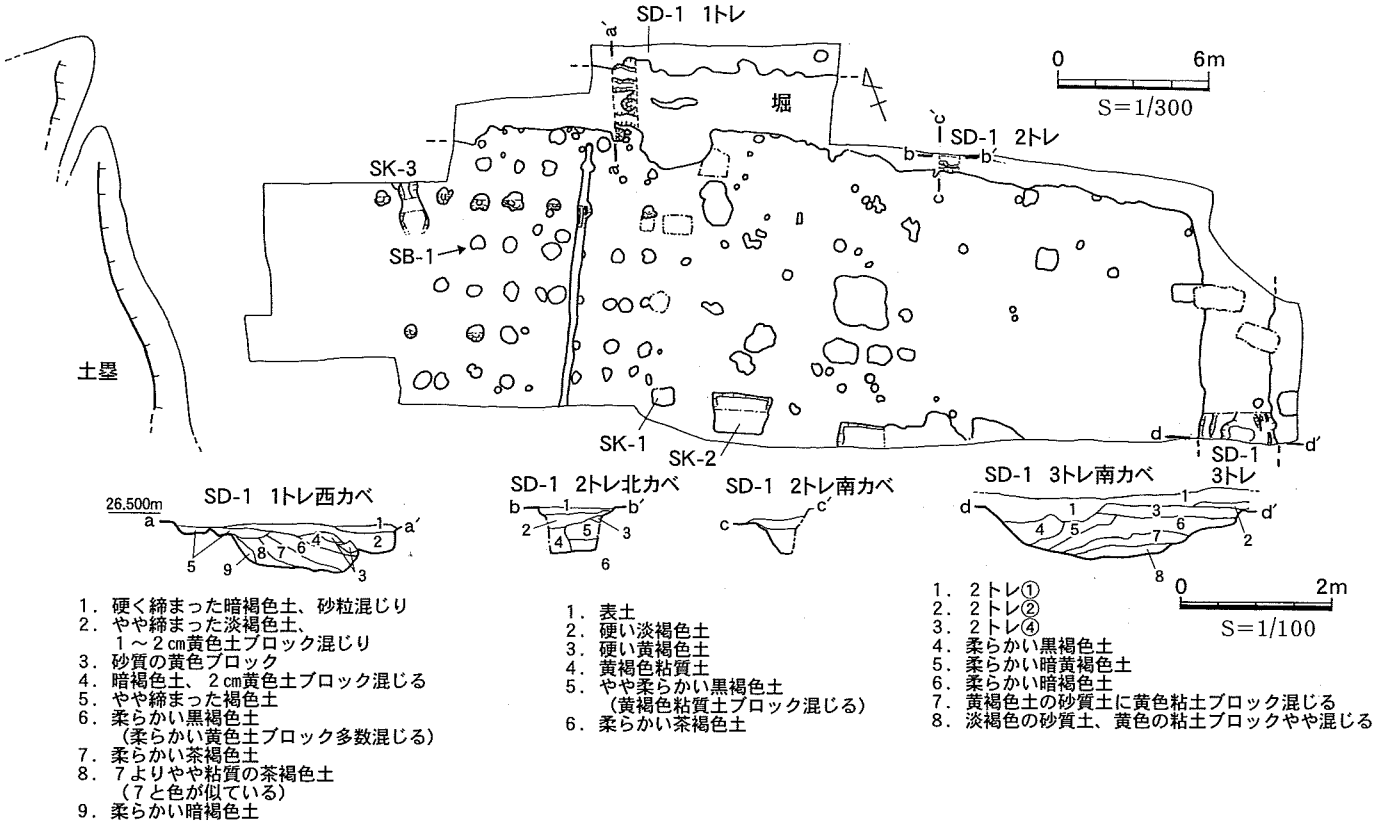
当地は、官道に近い場所で道路面よりやや高くなった空地であった。東西に細長い土地で、中央より東側半分に民家建設の計画があがり、周知遺跡内であることから確認調査を行うこととした。ただ、真横が道路であるため、土の移動やプレハブの設置などの問題が生じた。しかし、遺跡調査への地元理解者の協力により、開発対象区外の西側半分も調査可能となり、将来をみこして空地全面を確認調査対象範囲とした。

調査の結果、調査区の縁辺を囲むように幅約１ｍの溝SD-1が東から北側にＬ字にのびていた。調査区の西端には土塁が現存しており、調査区の北側の隣家はかつて土塁を削平して建設したと聞き取りできたことから、SD-1は中世八並城に伴うものと考えられる。

そのSD-1に囲まれる形で検出されたのが、調査区西側に位置するSB-1である。この建物は柱穴の直径が約50～60㎝と小さいものの、南北方向に４間×東西方向に５間の総柱建物で、6.75m×6.75m＝45.6㎡の床面積を持つ。柱間は約1.3m～1.7mである。柱穴の深さは非常に浅く、表面が後世に削平を受けたと思われる。第33図で、建物の中央を南北に走る細い溝は近代のものである。調査区東側に検出された土坑やピットはいずれも近代～現代のもので、SB-1の東側は空間だったと考える。堀、総柱建物、土塁は八並城の同時期の施設であろう。一部開発に伴うものとはいえ、保存の方策をさぐる調査であったことから、遺構の掘削は最小限にとどめ埋戻しを行った。

この場所は、官道の近くではあるが、官道から集落に入る入り口には今も小高く土塁が残っており、土塁に沿うように道は東に一度屈曲し、集落の中を長者屋敷官衙遺跡方面へとのびる。入り口の土塁は集落を外敵から隠すものであり、入ってくるものを攻撃しやすい構造になっていたと考えられる。SB-1はその入り口近くにある建物で、総柱の櫓のようなものであったのではないか。これまで八並城は長者屋敷官衙遺跡の１区や集落の中から堀、土塁、地下式土坑を確認し、同時期かと思われる側柱建物も検出していたが、総柱建物は初めての発見である。さらに、堀、土塁、総柱建物の関係がセットで確認できたことは今後の八並城の全容を解明する上で有意義な資料となった。幸い、SB-1が検出された場所は民家建設の予定地からはずれている。開発計画のあった土地については協議中である。集落内には堀や土塁が点々と現存しており、それらの保存・活用が今後の課題である。

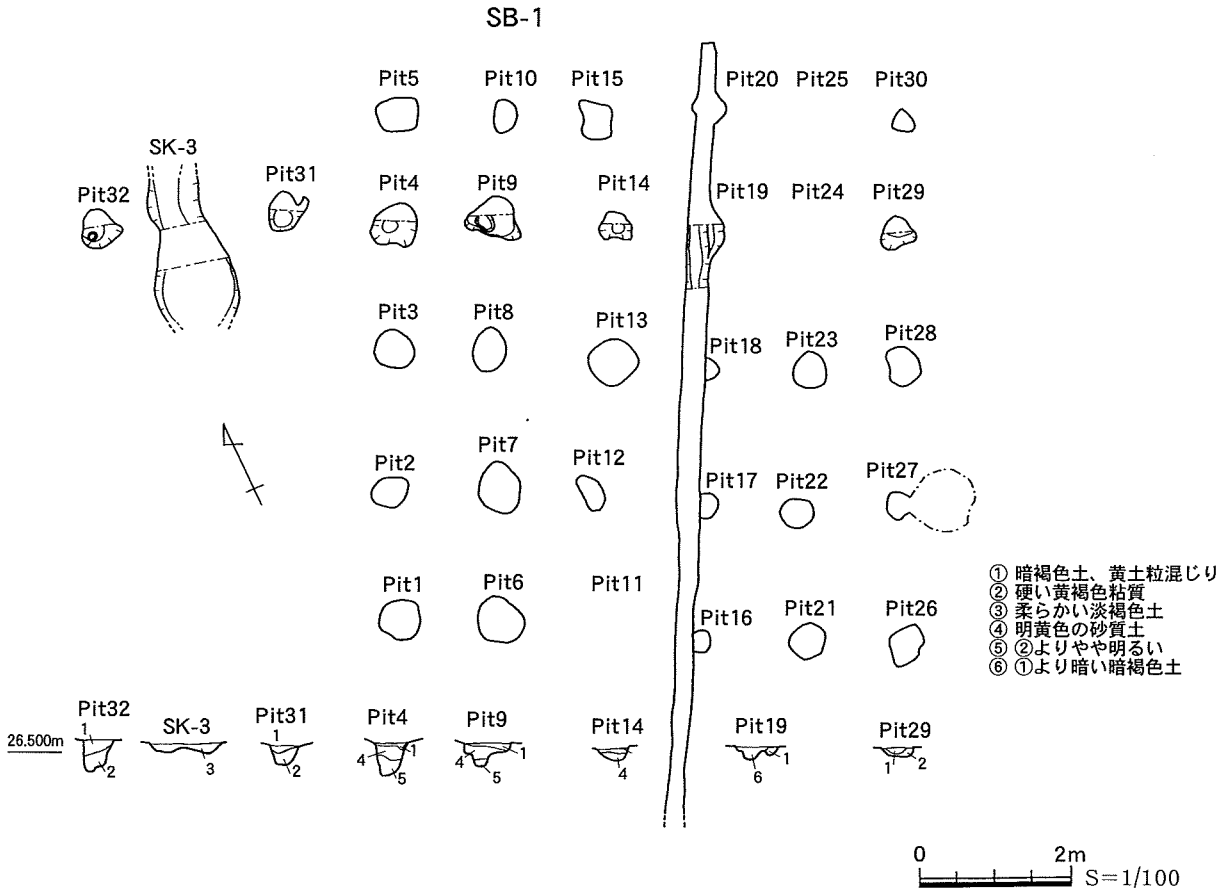
付記）この７区を調査するにあたり、関係各氏との調整を一手に引き受けてくださったのは地元在住の故東明泰隆氏です。東明氏は遺跡保存の大切さに十分な理解を示され、調査の進行と遺跡保存に向けてご尽力されました。残念ながら調査概報の刊行を目前にして急逝された氏に感謝の言葉をささげるとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。



1．硬く締まった暗褐色土、砂粒混じり
2．やや締まった淡褐色土、
　1～2㎝黄色土ブロック混じり
3．砂質の黄色ブロック
4．暗褐色土、2㎝黄色土ブロック混じる
5．やや締まった褐色土
6．柔らかい黒褐色土
　（柔らかい黄色土ブロック多数混じる）
7．柔らかい茶褐色土
8．7よりやや粘質の茶褐色土
　（7と色が似ている）
9．柔らかい暗褐色土

1．表土
2．硬い淡褐色土
3．硬い黄褐色土
4．黄褐色粘質土
5．やや柔らかい黒褐色土
　（黄褐色粘質土ブロック混じる）
6．柔らかい茶褐色土

1．2トレ①
2．2トレ②
3．2トレ④
4．柔らかい黒褐色土
5．柔らかい暗黄褐色土
6．柔らかい暗褐色土
7．黄褐色土の砂質土に黄色粘土ブロック混じる
8．淡褐色の砂質土、黄色の粘土ブロックやや混じる



① 暗褐色土、黄土粒混じり
② 硬い黄褐色粘質
③ 柔らかい淡褐色土
④ 明黄色の砂質土
⑤ ②よりやや明るい
⑥ ①より暗い暗褐色土

第33図　八並城跡７区平面図

写真23　調査前風景（西→東）

写真24　調査区西端の土塁（東→西）

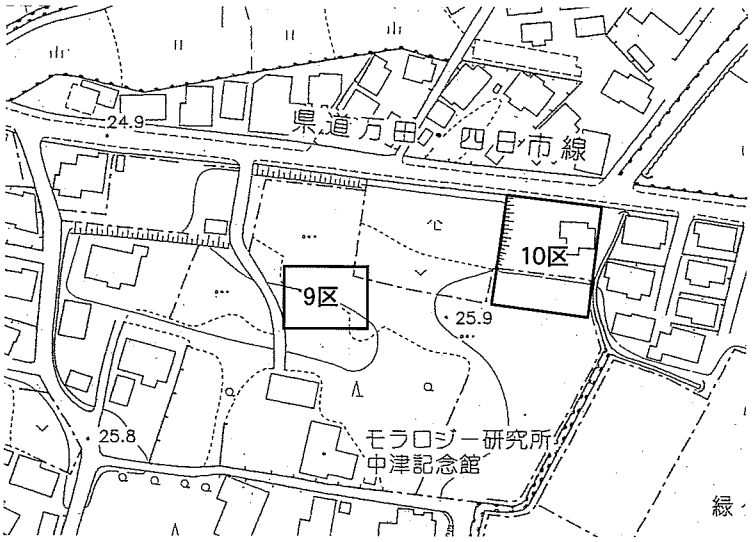
写真25　道路側からみた調査区（東→西）

写真26　総柱建物跡SB-１（西→東）

写真27　SD-１（南→北）

写真28　SD-１断面（東→西）

八並城跡９区



第34図　八並城跡調査区位置図（S=1/2,500）

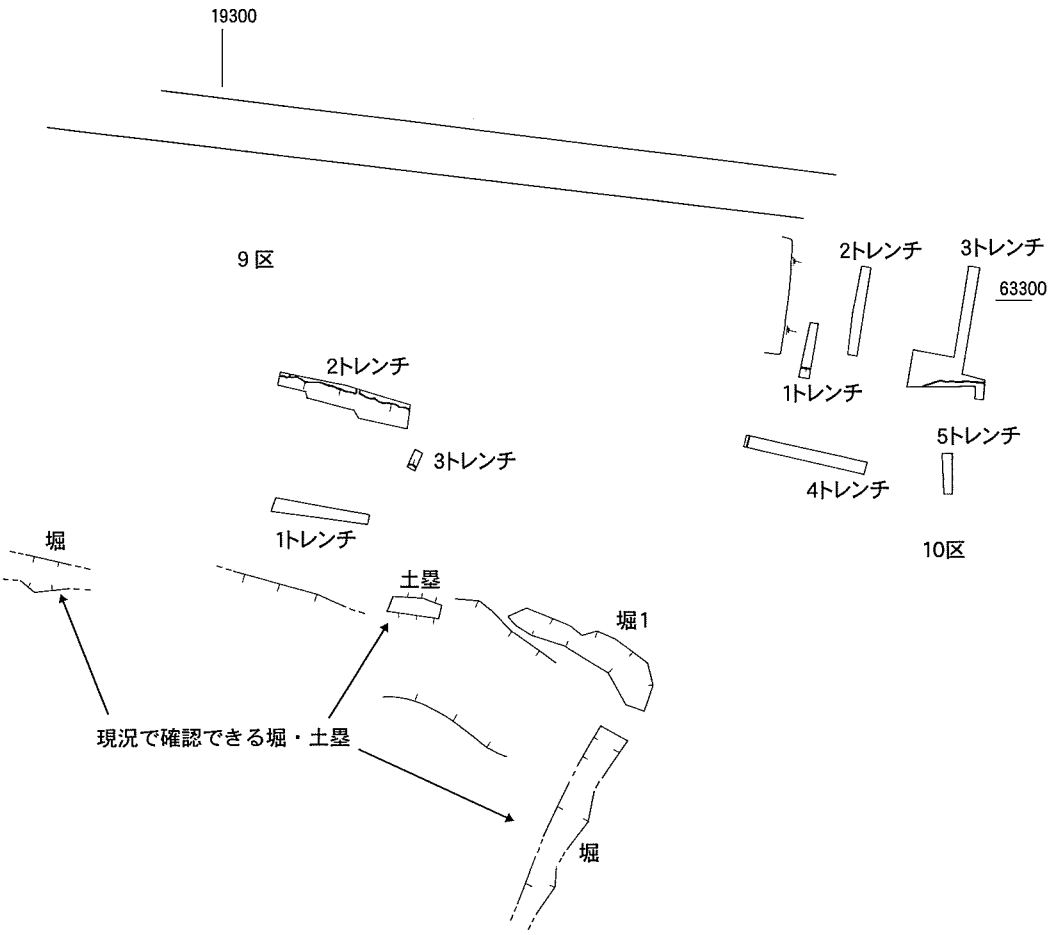
調査に至る経緯

平成23年７月、公益財団法人モラロジー研究所より廣池千九郎記念館建て替えに伴う埋蔵文化財の照会がなされた。照会地は八並城跡の北側に位置し、敷地内では堀や土塁の痕跡が現在でも確認できる。中津市教育委員会で事前の確認調査の実施を決定した。

トレンチ

調査区に３本のトレンチを設定し重機により掘削を行った。１トレンチではピットや植物の抜き取り痕が確認された。植物の抜き取り痕は土層から近代のものと判断した。ピットは掘り下げてなく時期は不明であるが、一部は植物の抜き取り痕を切るものがある。２トレンチでは溝状遺構が検出された。トレンチで幅は確認できなかったが3.5m以上。一部を重機で掘削し底は人力で掘り下げた。深さ約1.1m。遺物は検出されなかった。この溝状遺構は現地形で確認できる堀１と平行に走る。３トレンチは溝状遺構を確認した。２トレンチで確認された溝状遺構の対岸か。対岸になれば溝状遺構の幅は約８ｍになる。植え込みや埋設物などで溝状遺構の幅は確認できなかった。しかし、聞き取りで堀１は二重の堀であったことが確認されており、３トレンチで検出した溝状遺構は別になる可能性が指摘される。

写真29　９区２トレンチ



第35図　八並城跡トレンチ図（S=1/1,000）

八並城跡10区

調査に至る経緯

９区の調査結果から建設予定地の変更の申し出があり協議の結果、９区より北東側の地点で確認調査の実施が決定した。

トレンチ

調査区に５本のトレンチを設定し重機により掘削を行った。１トレンチは溝状遺構が確認された。調査地の約半分北側は近年モラロジー研究所が個人から購入した土地で境界にはブロック塀が存在していた。溝状遺構は中心部分やや南側にこのブロック塀が構築される。基礎部分を一部取り除いたが溝の底は検出できなかった。溝状遺構の深さは１m＋α。２トレンチは遺構なし。３トレンチはピットと溝状遺構が検出された。溝状遺構は１トレンチで検出されたものの続きである。この溝状遺構の南側にも樹木が植えられ、トレンチの掘削ができなかったため幅は不明。この溝状遺構も堀１とほぼ平行に走る。ピットは10数基で掘り下げてなく時期は不明。４トレンチは溝状遺構１条。幅約15cm。掘り下げてなく深さ、時期などは不明。１トレンチ、３トレンチの溝状遺構に直行する方角にのびる。５トレンチは遺構なし。地山検出面は重機のバケットの痕跡が数ヶ所確認された。４トレンチ、５トレンチ付近は近代に地下げされたことが確認された。

小結

今回の９区、10区で確認された溝状遺構は八並城跡の堀跡と推定される。調査区から長者屋敷官衙遺跡までの間には堀や土塁の痕跡が現在でも確認される。方形の区画が連続して展開し城として機能したと推測される。展示施設は今回の確認調査の９区に建設が決定し、本調査の実施が決定した。

写真30　10区１トレンチ

報 告 書 抄 録

書　　名	沖代地区条里跡　大塚西中野地区　永添玉迫地区　高畑下ノ町地区 佐知遺跡　山中城跡　中津城（Ⅸ）　古代豊前道跡　長者屋敷官衙遺跡 八並城跡
副 書 名	2011年度市内遺跡発掘調査概報
巻　　次	5
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第56集
編集者名	高崎　章子　　花崎　徹　　浦井　直幸
編集機関	中津市教育委員会
所 在 地	〒871-8501　大分県中津市豊田町14番地3　TEL 0979-22-1111
発行年月日	2012年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
沖代地区条里跡 井田地区	大分県中津市 中央町2丁目 663番1他	44203	203007	33° 35′ 02″	131° 11′ 44″	20110921	20㎡	集合住宅建設
沖代地区条里跡 苅又地区	大分県中津市 中央町1丁目 748番3他	44203	203007	33° 35′ 11″	131° 11′ 33″	20111101	15㎡	老人ホーム建設
沖代地区条里跡 橋爪地区	大分県中津市 沖代町2丁目 177番地他	44203	203007	33° 34′ 44″	131° 12′ 08″	20120216 ～ 20120229	800㎡	宅地造成
大塚西中野地区	大分県中津市 大字大塚 299番1他	なし	なし	33° 36′ 02″	131° 12′ 26″	20111027	5㎡	携帯電話用鉄塔建設
永添玉迫地区	大分県中津市 大字永添 1629番	なし	なし	33° 36′ 03″	131° 12′ 27″	20111027	6㎡	集合住宅建設
高畑下ノ町地区	大分県中津市 栄町 1629番	なし	なし	33° 35′ 39″	131° 11′ 08″	20111102	20㎡	診療所建設
佐知遺跡	大分県中津市 三光佐知47番地他	44203	203152	33° 32′ 43″	130° 11′ 39″	20111115 ～ 20111116	200㎡	市道改良
山中城跡	大分県中津市 大字福島1234-1他	44203	203049	33° 33′ 26″	131° 13′ 50″	20111121 ～ 20111122	3㎡	水路改良
中津城	大分県中津市 1312（三ノ丁）	44203	203003	33° 36′ 15″	131° 12′ 25″	20120201 ～ 20120224	320㎡	遺跡確認
古代豊前道跡	大分県中津市 大字永添字堀熊 1319-2	44203	203138	33° 34′ 23″	131° 12′ 08″	20120110 ～ 20120131	1,792㎡	遺跡確認
長者屋敷官衙遺跡	大分県中津市 大字永添字長者屋敷 2327-2	44203	203119	33° 33′ 49″	131° 13′ 30″	20110713 ～ 20110927	464㎡	遺跡確認
八並城跡	大分県中津市 大字永添字東ノ浦 2369-2、2369-3他	44203	203046	33° 34′ 11″	131° 12′ 25″	20110426 ～ 20111220	1,314㎡	遺跡確認

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖代地区条里跡井田地区	なし	なし	なし	なし	なし
沖代地区条里跡苅又地区	なし	なし	なし	なし	なし
沖代地区条里跡橋爪地区	集落？	古墳	溝	須恵器・土師器	古墳時代の溝
大塚西中野地区	なし	なし	なし	なし	なし
永添玉迫地区	なし	なし	なし	なし	なし
高畑下ノ町地区	なし	なし	なし	なし	なし
佐知遺跡	集落	弥生・古墳	竪穴住居	弥生土器・須恵器	住居・土坑・溝・柱穴を確認
山中城跡	中世城館	中世	堀	瓦質土器	堀のトレンチ調査
中津城	近世城郭	近世	土塁	なし	中津城下町惣構の土塁（おかこい山）
古代豊前道跡	道路	古代	なし	なし	なし
長者屋敷官衙遺跡	官衙	古代	掘立柱建物	なし	下毛郡衙正倉跡関連施設か
八並城跡	城館	中世	掘・建物	土器小片	城郭入り口の櫓跡か

沖代地区条里跡　大塚西中野地区
永添玉迫地区　高畑下ノ町地区
佐知遺跡　山中城跡
中津城（IX）　古代豊前道跡
長者屋敷官衙遺跡　八並城跡

2011年度　市内遺跡発掘調査概報５
中津市文化財調査報告 第56集

2012年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社